

ヤング世代のライフスタイル研究

卒業、就職、転職、結婚、出産……人生の選択を迫られる若者世代。2003年秋に行ったアンケート調査とインタビュー調査から、20代～30代前半の若者たちのライフスタイルを考察する。「自分像」「モラトリアム」「つながり」の視点から、彼らの自分らしい生き方を見てみよう。

若者の「自分」像

三浦彩子 HRI研究員



なりたい自分と現実の「自分」

2003年秋、HRIは20～34歳の若者を対象にアンケート調査を実施した。

20～34歳という時期は、人生において非常に変化が多い時期といえる。多くの人がこの時期に、学生という身分を捨てる。んらかのかたちで働きはじめる。この時期に、結婚し子どもを産む人も多い。このよ

うな移行期に、彼らはどのようにして自分の道を選んでいくのだろうか。どのようにして、自分の進路・生き方を決めていくのだろうか。

1980年代以来、「自分探し」という言葉が若者の間で流行し、2003年に出版された『劇的自己分析』坂本直文著（が就職活動中の学生に爆発的に売れている。これらことから明らかのように、人が自分の進路・生き方を考えるとき、よりどころとするのは、自分が将来どのような「自分」になりたいと思っているのか、ということと、いまの「自分」をどのようにとらえているか、ということではないかと思われる。

そこで、本稿ではアンケート結果をもとに、若者がいまの「自分」をどのようにと

らえているのか、将来どのような「自分」になりたいと思っているのか、という彼らの「自分像」を探ってみた。また、それを容易だと思っているのか、困難だと思っているのか、楽観視しているのか、悲観視しているのかといった、彼らの「見通し」もあわせて探っていきたいと思う。

若者の「自分像」と「見通し」

アンケートの結果、若者の「自分像」「見通し」の特徴として挙げられることは以下の通りである。

自分にしかできないことを尊重

「自分にしかできないことをしたい」に賛同するのは全体の83.6%を占める。とく

に学生は91%という高い数値を示した。「周囲の反対にあつても自分の意見を貫きたい」も70%という高い結果となつた。

このいわば「自分重視」の傾向は、仕事・会社の選択理由にも表れている。「仕事・会社を選んだ理由」を尋ねると、「自分のやりたい仕事ができるから」(1位)、「自分の能力・専門性を活かせるから」(3位)が、「会社の安定性」(4位)、「給料や福利厚生」(5位)、「将来性」(9位)などを上回つた。また、困難をとまなずても自分のやりたい仕事を貫きたいに賛同する人も72.2%と高い結果となつている。

ライフプランはまだ定まらない

「自分の希望するライフプランや生き方」について尋ねると「決まっている」は33.1%、「決まっていない」は60.7%、「考えたことがない」は5.9%でほとんどの人は希望する生き方について考えたことがあるが決まっている人は決まっていない人の半数以下という結果になつた。

しかし、「若いうちはまだ生き方を定めないほうがいい」は44.3%で、半数以上が「若くても生き方を定めたほうがいい」と思っていることとなる。

目標に向かって努力することを尊ぶ

「アイデンティティは、理想や目的に向

かつて努力することで達成することができるとは78%で、目標に向かって努力することになんらかの価値を認めている人は8割近い。

また、「自分の人生は具体的な人生設計にもとづいて進めるのが望ましい」という「人生設計志向」を持つ人も、68.4%という高い結果となつた。

理想は幸せな家庭&のんびり

「自分にはできないことをしたい」という願望が強いわりにはあまり野心的ではないようだ。理想の生き方について尋ねると、「幸せな家庭生活を築く」が2位以下を26ポイント以上引き離し、圧倒的1位となつた。2位は「のんびり暮らす」で17.1%。こののんびり暮らすは、年齢が上がるにつれて高くなっていく。

それ以外の、「お金持ちになる」(4位)、「仕事で成功する」(5位)、「専門的な知識・スキルを身につけた人材になる」(6位)などはいずれも10%以下という低い数値となつた。

社会や共同体に対する意識は低い

「社会には自分の果たすべき役割がある」に賛同する人は、全体の71.2%に及びが彼らが社会に抱いている関心や意識は高いとはいえない。「関心のあること」で、最

下位3つを占めたのは、政治・経済などの社会問題「地球環境問題」ボランティアなどの社会的運動」。理想の生き方でも社会的なもの是非常に低く、「周囲の人を幸せにする」は26%、「社会のために役立つ」は23%、「高い社会的地位につく」は12%、いずれも1割に満たなかつた。

経済的なことに対する関心・不安と自立志向が高い

「いま一番関心のあること」の1位は、「自分の収入・バイト代」。10年後の生活で不安に思うこと」の1位は、「経済的なゆとり」。経済的なことに関する関心・不安の高さがうかがわれる結果となつた。

一方で、「経済的に自立した生活が望ましい」に賛同する人は男性94.4%、女性88.6%で、男女ともに高い結果となつた。

夢はあるけれども楽観視はしていない

「将来実現させたい夢がある」人は全体の78%。しかし、選択肢は多いが実際に選べる道は限られている「や、アイデンティティを確立できる人はそう多くはない」も70%以上を占め、夢を持ちつつも、クールで厳しい認識をしている人が多いことが分かつた。「10年後に不安がある」人も8割以上にと及んだ。

漠然とした不安

「自分には居場所がないと思うことがある」は40.1%、「自分の周りで起きる出来事はしょせん他人事なので当事者意識は感じない」は34.6%、「いくら努力してもダメなことが多い」は32.5%。これらはいずれも半数以下となつた。しかし、これらが多いのか少ないのか判断するのは難しい。20~34歳の若者の3人に一人以上が、「居場所がない」努力しても報われない」などと思つている状態は果たして少ないといえるだろうか。

また、「自分の生き方は自律した生き方だと思つた」は48.5%、「能力や業績に対して自信がある」は52.9%。このような「自信」を問う質問に対する賛同も半数程度で判断が難しい結果となつた。自信がある人とならない人の二極化が進んでいるというところだろうか。

以上アンケートの結果を見ると、「期待」と「諦め」の双方を抱えこむ、若者の姿が浮かび上がってくる。「結局、選べる道は限られている」と認識していながら、「自分にはできないことをしたい」と考える若者たち。その理想と現実のギャップを、彼らはどのように感じているのだろうか。

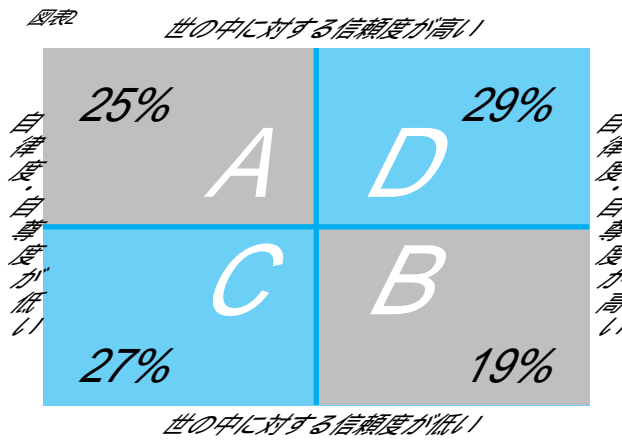
それを知るヒントになりそうな自分の

能力に対する「自信」、努力すれば報われるという「安心感」などに関する質問については、いずれもとらえにくい回答しか得られなかった。

グループ分類による分析

そこで、「自分像」や「見通し」に関して、似た傾向を持つ者同士のグループ分けを行った。そのグループ分けに対応する質問項目は、以下の通りである。

	自律度	自尊心	世の中に対する信頼
Aグループ	×	×	○
Bグループ	○	○	×
Cグループ	×	×	×
Dグループ	○	○	○



「自律度」を探る質問

「自分の生き方は自律した生き方だと思つ」

「自尊心」を探る質問(統合)

「自分にしかできないことをしていきたい」

「周囲の反対にあつても自分の意志を貫きたい」

「世の中に対する信頼度」を探る質問(統合)
「いくら努力してもダメなことが多い」

「自分には居場所がないと思つことがある」

この3つの軸に対する回答のレベルから

調査対象者全体を、4つのグループに分類した。それは自律度と自尊心が低く世の中に対する信頼度だけが低いAグループ、自律度と自尊心は高いが、信頼度が低いBグループ、自律度・自尊心・信頼度すべて低いCグループ、自律度・自尊心・信頼度すべて高いDグループという4グループである(図表1)。

その4グループの性格を、「自律度」「自尊心」「信頼度」の高低で整理し、グループごとの人数比を表したものが図表2である。便宜上、これからは、この4グループについては、以下のように命名し、話を進めることにする。

- A(自律度・自尊心が低く、信頼度が高いグループ)＝「つながり重視グループ」
- B(自律度・自尊心が高く、信頼度が低いグループ)＝「孤立グループ」
- C(自律度・自尊心・信頼度すべて低いグループ)＝「足場なしグループ」
- D(自律度・自尊心・信頼度すべて高いグループ)＝「安定グループ」

それぞれのグループに所属する人々の年齢、性別、職業などの特徴を調べてみると次のようになつた。

A、つながり重視グループ

・女性が男性の1.5倍以上多い。

・専業主婦、派遣、契約社員に多い。

・年収は低め(4グループ中3位)。

・女性は加齢にともない増加するが、男性は加齢にともない減少する。

・仕事と生活のバランスでは、生活中心の人が多い。

B、孤立グループ

・男性が女性の1.5倍ほど多い。30代男性がとくに多い。

・会社員が50%を占める。フリーターも正社員の次に多い。専業主婦、学生は少ない。

・年収は高め(4グループ中2位)。

・仕事と生活のバランスでは、仕事中心の人が多い。

C、足場なしグループ

・女性が男性より若干多い。

・男女ともにフリーターが多い。フリーターの半数以上がこのグループに属する。独身女性にも多い。男性は加齢にともない急激に減少するが、女性はそれほど変化がない。

・年収は最も低い。

・仕事と生活のバランスでは、生活中心の

人が多い。

D「安定グループ」

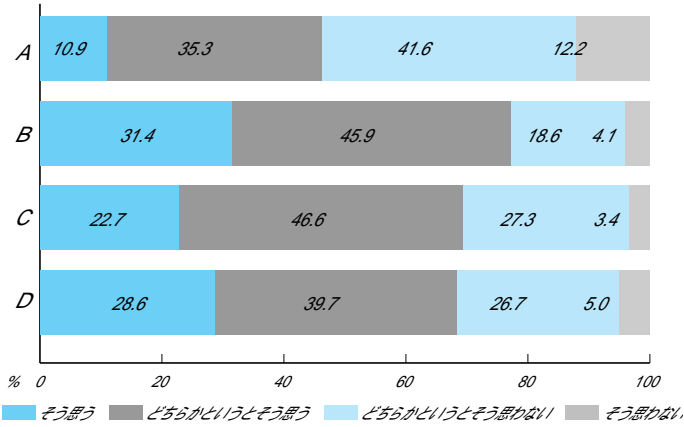
・男性が女性より若干多い。とくに既婚男性が多い。

・会社員が53%を占める。フリーター率が最も少ないグループ。

・年収は最も高い。

・仕事と生活のバランスでは、どちらも半々という人が多い。

図表 組織や家族に頼らず自立した生き方をしたい



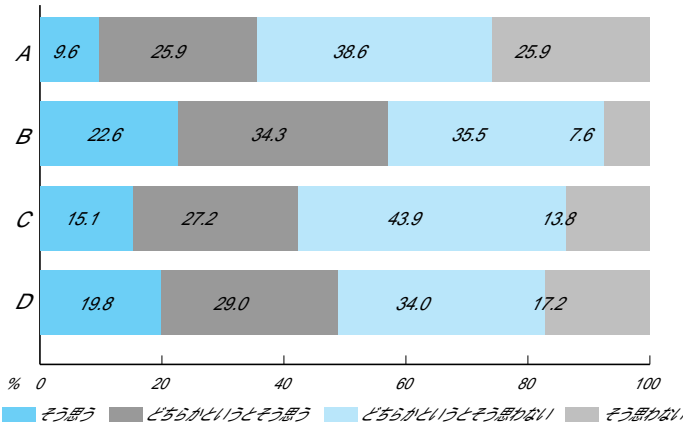
では、これからこの4つのグループの

「自分像」「見通し」に関する質問の結果を紹介したい。そして、その結果から「自律度」「自尊心」「信頼度」が「自分像」や「見通し」に及ぼす影響について考えてみたいと思いつ。

A「つながり重視グループ」へ「信頼度が高く」「自律度と自尊心が低いグループ」

生活満足度やゆとりが高く、将来不安

図表 一定の収入を得ようになったら家を出るべきだ

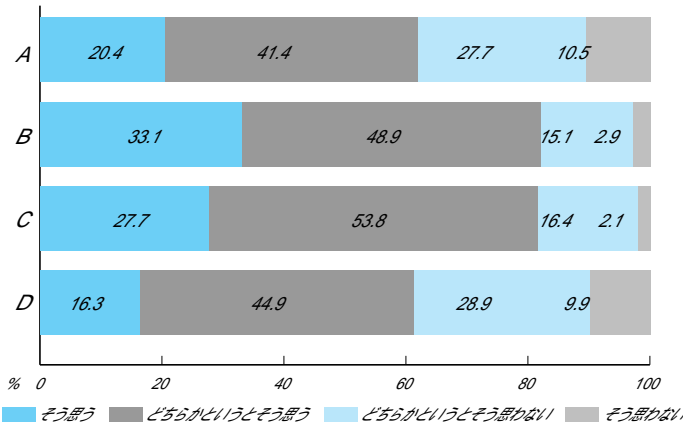


が少ない。「友人とつながっていないと不安」という人が少なく、「人づきあいが面倒」という人も少ない。自分の周りの出来事に対する共感が4グループの中で最も高く安定した人間関係を築いているように思われる。

この「つながり重視」グループに特徴的なのはその「自立志向」の低さである。「組織や家族に頼らず自立した生き方をしたい」(図表3)「一定の収入を得るようにならたら家を出るべきだ」(図表4)「経済的に自立した生活が望ましい」といった自立志向が4グループの中で最も低い。

また、夢を持つ人は少なく、人生設計志向も低い。ライフデザインが決まっている人も少なく、将来に関して何らかの展望を持っている人は少ないようだ。しかし、「努力するよりラクな生活がいい」という意見の人や、「選択肢は限られている」というシニカルで厳しい認識をしている人は少なく、楽観的である。

図表 選択肢が多様化しているが結局選べる道は限られている

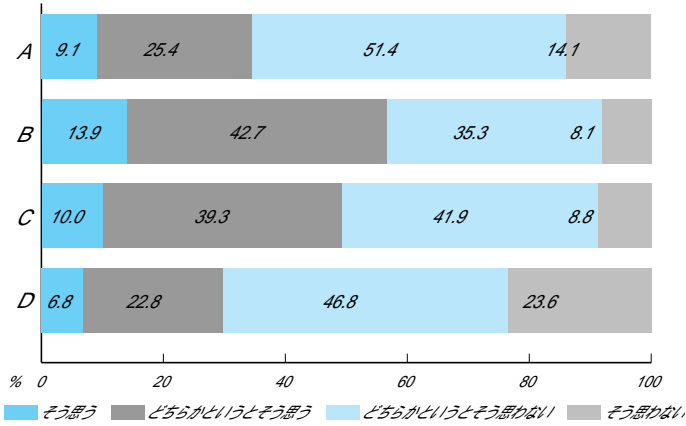


B「孤立グループ」へ「自律度と自尊心が高く」「信頼度が低いグループ」

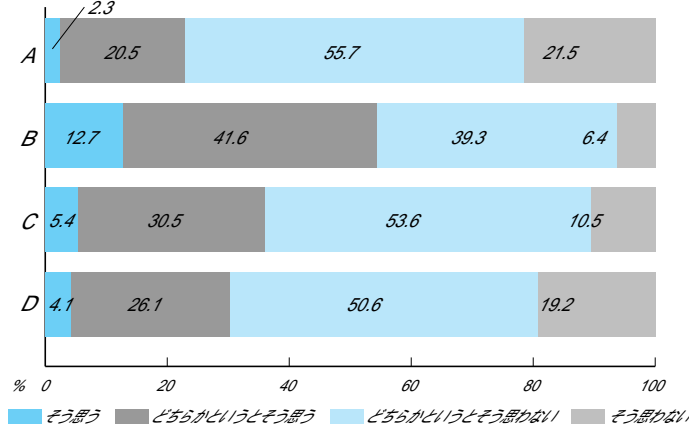
自分の生活能力や業績、潜在能力に対する強い自信を持つ。自立志向も最も高い。また、「将来実現したい夢がある」「自分の人生は具体的な人生設計に基づいて進めるのが望ましい」「アイデンティティは理想や目標に向かって努力することで確立できるものだ」が、いずれも最も高く強い自信と夢を持ち、人生設計し、目標に向かって邁進することに価値を認めている。「行け行け、どんだん」のタイプである。

しかし、「アイデンティティを確立して初めて一人前の大人といえる」「選択肢は限られている」(図表5)「アイデンティティを確立できる人はそう多くはない」も最も多く現実の可能性に対してはシニカルで

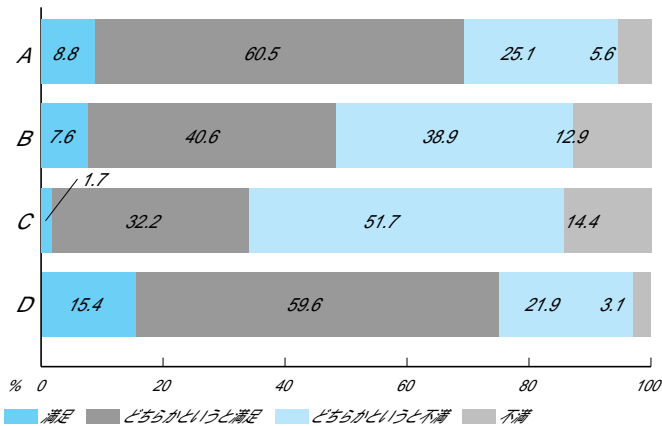
図表 目標を持って努力するより楽しくラクな生活がほしい



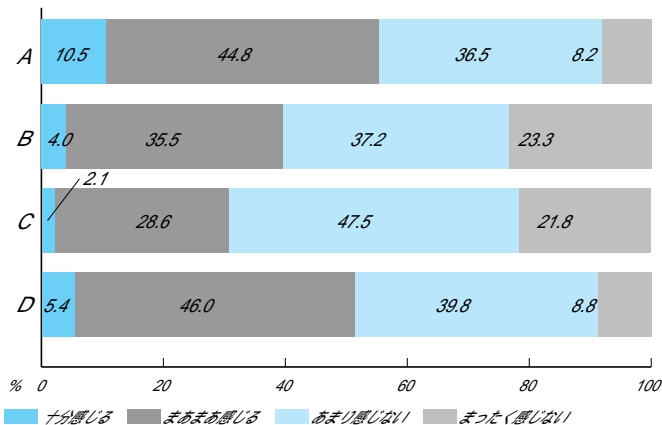
図表 周りで起きる出来事はしよせん他人事なので当事者意識は感じない



図表 生活満足度



図表 暮らしのゆとり



厳しい見方をしていることがうかがわれる。また、生活満足度やゆとりが低く、将来不安が強く、精神的に不安定な印象を受ける。

この「孤立グループ」に特徴的なのは目標志向の強さとは裏腹に「努力するよりラクなほうがいい」という傾向が強い点である(図表6)。とくにこのグループが仕事に対して抱いている「ラクであればいい」という傾向は顕著で、他の3グループに比べて、「目標を持って努力するよりいまの仕事がいい」人から指示を受けたほうが

仕事をしやすいなどが、ずば抜けて高い結果となった。しかし、彼らは決して怠け者というわけではない。1年間で学ぶ活動を「人の割合はこの「孤立グループ」が、「安定グループ」に次いで高いのである。

彼らは、自分に対する理想と世の中に対する要求がひときわ高く、それがかなえられないがゆえに、不満がたまって刹那的な傾向が強くなっているのではないだろうか。

また、「友だちとつながっていないと不

安」が多い反面、「人づきあいは面倒」と回答する人も多く、良好な人間関係を築いてるとはいえない。周りの出来事に対する共感(図表7)も、4グループの中でひときわ低く、自分のことで手一杯という印象を受ける。

③ 足場なしグループ(自律度、自尊心、信頼度がすべて低いグループ)

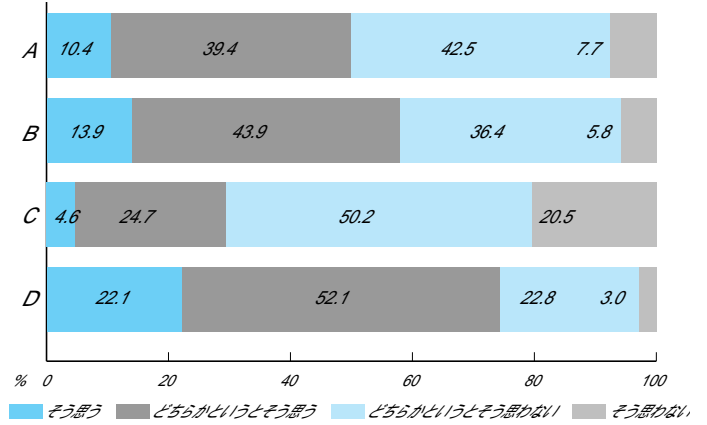
生活満足度(図表8)、「ゆとり」(図表9)が最も低く、将来不安が最も強い。

また、自分の能力に対する自信や期待

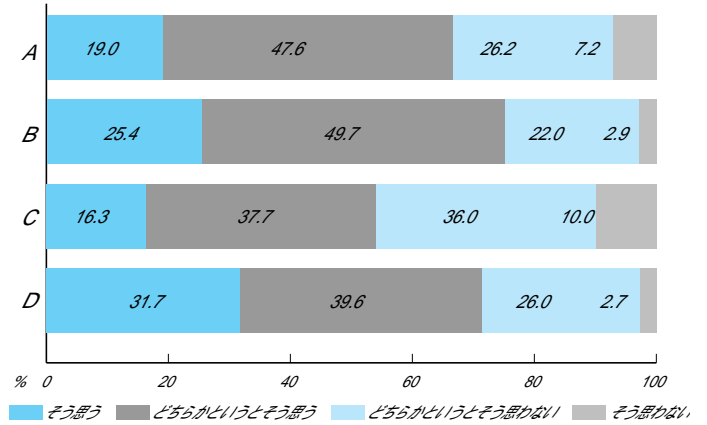
が最も低く、夢を持っている人、ライフデザインが決まっている人、キャリアデザインを考えて働いている人が最も少ない。「選択肢は限られている」と思う人が多く、明るい将来展望はほとんど感じられない。「1年間で学ぶ活動をした」人の割合も最も低い。

人間関係的にも、「孤立グループ」と同様、友だちとつながっていないと不安」という人が多い反面、「人づきあいを面倒」と思う人も多く、あまり良好とはいえない。自分に自信が持てない状態で、人間関係

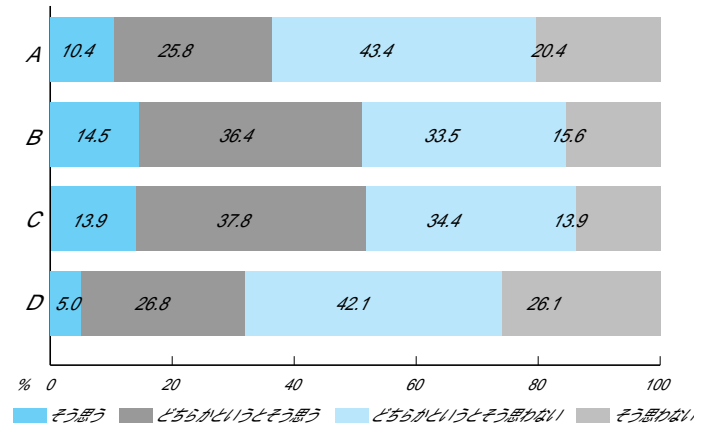
図表0 自分の能力や業績に自信を持っている



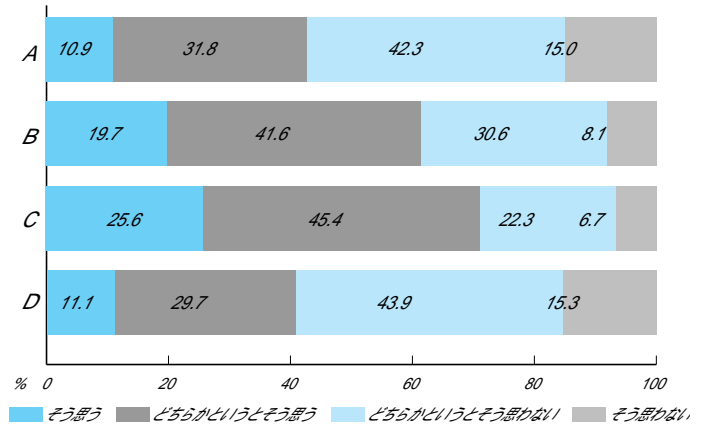
図表1 自分の潜在能力に期待している



図表2 友だちとつながり方が不安



図表3 人づきあいは面倒くさいと思うことがある



的にもストレスが多く、精神的に不安定な状態に陥っているように思われる。

D「安定グループ」は「自律度、自尊心、信頼度がすべて高いグループ」

生活満足度ゆとりが最も高く、将来不安が最も少ない。

また、自分の業績や生活能力に対する自信が高く(図表10、11)、人の評価を気にする人が少ない「友だちとつながっていないと不安」(図表12)「人づきあいは面倒」(図表13)と考える人も最も少ない。すべて

が安定した状態にあるように思われる。そして、希望するライフデザインや生き方が決まっている人、キャリアデザインを決定して働いている人が多い(図表14)。

「選択肢は限られている」「アイデンティティを確立できる人間はそう多くはない」と考える人は最も少なく、現状認識、将来展望に明るさが感じられる。

必要なのは「信頼感」の回復

このように見ていくと、「自律度・自尊

度」が高い「安定グループ」と「孤立グループ」。「信頼度」が高い「つながり重視グループ」と「安定グループ」、それぞれに共通して高い項目があることに気づかされる。

つまり、「自律度・自尊心」の高低、「信頼度」の高低によって、同じように連動する項目があるということである。

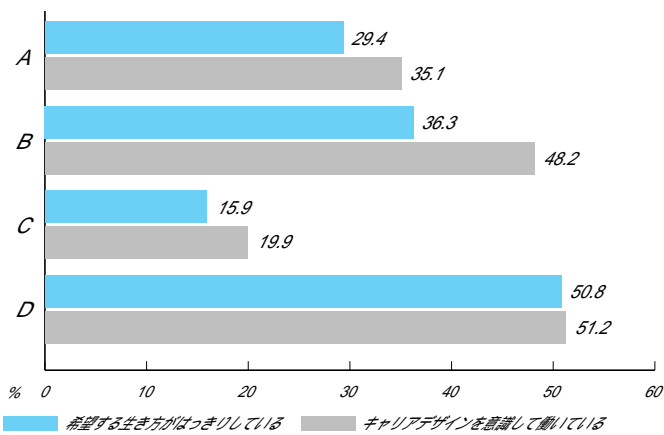
「安定グループ」と「孤立グループ」に共通して高く、「つながり重視グループ」と「足場なしグループ」に共通して低い項目すなわち「自律・自尊」に関連が深い項目

は、「自信」「ライフデザイン・キャリアデザイン決定度」である。

一方、「安定グループ」と「つながり重視グループ」に共通して高く、「足場なしグループ」「孤立グループ」に共通して低い項目すなわち、世の中に対する「信頼度」に関連が深い項目は、「生活満足度」「ゆとり」「将来不安」「当事者意識」「人間関係」「選択肢に対する考え方」「刹那的傾向」である。

すると、若者世代に関しては、「世の中

図表4 自分の希望する生き方やキャリアデザインについて



に対する信頼感」のほつが「自律・自尊」よりもより多方面の事柄を、より不安のない安定した状態にすることに貢献していることが分かる(図表15)。

しかし、「世の中に対する信頼感」が弱い「孤立グループ」や「足場なしグループ」が、いまの不安定な状態から抜け出したいと考えて、なんらかの行為を起すときには注意が必要である。

「足場なしグループ」が、自分の能力が高まるように努力したり、将来のことを考

えていろいろな準備をしたり、それによつて自信をつけたり、といった努力を始めたとしてもそれが「信頼感」の獲得に結びつくとは限らない。もちろんそれで「信頼感」が手に入ることもあるだろう。しかし「孤立グループ」のように、自信も夢もあるのに、「信頼感」だけがないという状態もありうるのである。

また、「孤立グループ」がいまの理想は高いが、報われていない」という状態を抜け出そうとして、理想や夢のレベルを下げようとした場合、ただ「足場なしグループ」に移行するだけに終わってしまうという可能性がある。

若者の不安を癒る、私らしく

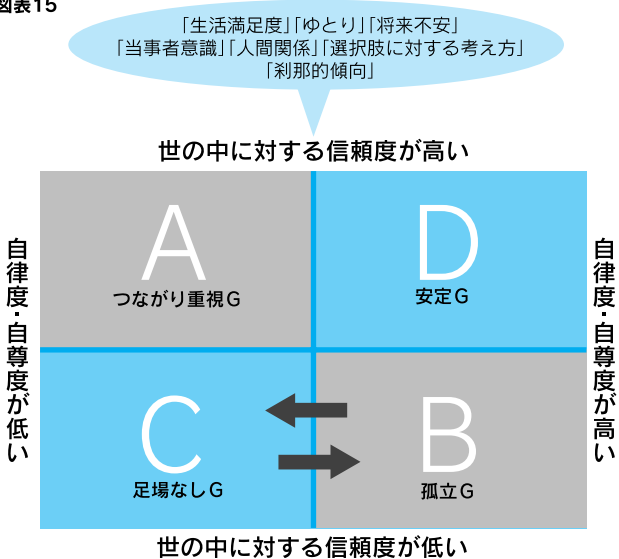
いまの社会は、自分の個性を發揮せよ、自立(律)せよ、という、自分「重視」の傾向が強い。学校でも、企業でも、それが奨励される。この自立(律)志向の奨励は、学校や企業だけではなく、私が私であるために「私らしくなるために」というキャッチフレーズをちりばめた宣伝、流行歌など、さまざまな分野で見られる現象である。

しかし、自立(律)すること、自分の個性を發揮すること、自分の夢や欲求を追求することを奨励するこの風潮は、いままごんどんエスカレーターし、本当の自立(律)「本当の個性の發揮、本当の夢や欲求の追及が

なされないと幸せにはなれない」という不安をも煽っているのではないだろうか。自立(律)志向が強くと自信と夢を持ちそれに向かつて邁進しようとするのもうまくいっていない「孤立グループ」はその不安を体現しているグループともいえる。この「孤立グループ」が示しているように、自立(律)することも、自分の個性を發揮することも、身の回りの出来事に対する共感人間関係を良好に保つ精神状態、物事への好意的な判断といったもの、すなわち、世の中に対する信頼感が土台になれば、現実には難しいのである。

これらの結果を踏まえると、若者たちにとつて、まず「自立(律)して、それから「つながり」を」という順番はあまり適切ではないようだ。「努力すれば報われる」「居場所がある」という、世の中に対する信頼感の回復こそ、若者にとつて、「自立(律)」以前に、いま最も必要なことなのではないだろうか。

●図表15



モトリウムから 自律へ

吉澤康代 HRI研究員

report

めざすべきゴールを探す 若者世代

長くなる青年期 責任のない自由で

「昔と比べて複雑な世の中、自分のやりたいことを見つけるのは簡単ではない。フリーターや転職が多いのはそれを反映している。20歳過ぎから働かなければならないのは、この実態に合っていないと思う(HRI学生グループインタビューより)」。社会状況の変化などを考えると、この意見は正論といえるだろう。

私たちの平均寿命は50年ほど前と比べて約15年も長い。初婚年齢・出産年齢が高くなる一方、6・3・3・4制の学校教育制度は1947年以来ほぼ変わらなず、学校を卒業してから結婚して子ども

を持つまでの期間が長くなっている。

就学期間も延びている。高校進学率は1974年にすでに90%を超え、2003年には96・1%、大学・短期大学の進学率も49%に達している。義務教育を終え、すぐに働かなければならないという状況は30年以上も前に終わっている。学費は親が負担し、子どもは知識の習得や社会経験のために自由な時間を過ごすのが一般的となっている。さらに、経済不況で卒業後、働きたくても働き口が見つからないという状況もある。

一般に「青年期」は生理的成熟12、13歳(に)よって始まり、職業選択・結婚・子どもの養育などが終わりの目安とされている。近年の高等学校・就学期間の延長・就職難・晩婚や高齢出産などは、青年期を

確実に長くしている。そして、青年期特有の「責任のない自由さ」が延長され、かろうじて人生の選択が難しくなっている。これがいわゆる「モトリウム」として批判されているのである。

「自立していない」「将来のことも考えず、なんの責任も義務も果たさず」といえない「モトリウム」への批判はさまざまである。モトリウムが就業形態に反映された「フリーター」も議論されている。「現実から逃げている」「夢ばかり追っていて考えが甘い」と辛口の意見もあれば、「夢や目標を持ち、それに近づくためのステップなら意味がある」「日本の企業はフリーターがいないと成り立たない」といった擁護論もある。

将来を左右する若者の初期キャリア

このような議論の背景には、将来社会を担う若者世代が社会に出た初期の段階で、働くために必要な能力を身につけられずにいるのではないかと、いつ危惧がある。日本労働研究機構(現・独立法人労働政策研究・研修機構)の調査研究では、高校を卒業後すぐに就職せず遅れて就職した場合、職業能力の習得が遅れ、能力向上が進まないと報告されている。日本労働研究機構(1996年)・新規学卒で正社員になれば、入社後の数年間は企業が

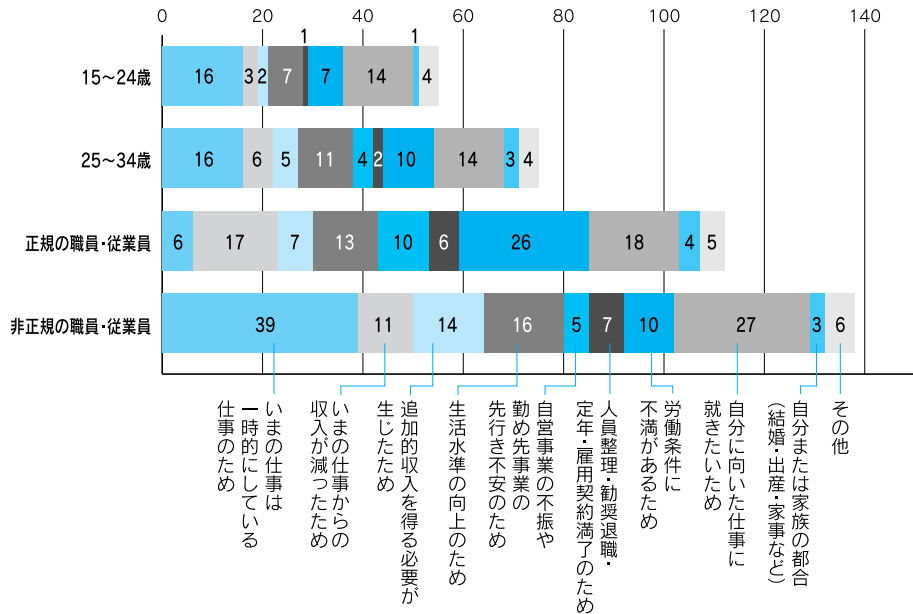
提供するOJTやOff-JTなどで専門知識や特定技能、仕事上のマナーや人的ネットワークを得られる。キャリア形成の初期段階に、どのような職場を経験し教育・訓練を受けたかが、その後の仕事やキャリアに影響するのである。

しかし、現実には若者の離職傾向は「五・三問題」として取り上げられるほどである。入社後3年以内に会社を辞める割合が、中学卒で7割、高校卒で5割、大学卒で3割という高い離職率のことである。不況下で就職が困難な状況においても、この離職率は下がらず、仕事への低い執着心などが問題視されている(内閣府・2003年)。

しかし、以前よりも転職や中途採用が容易な環境を考えると、若者世代の高い離職・転職率は、低い就業意識より、多様な選択肢から自分に合った仕事や職場を探するための試行錯誤と解釈するほうが自然ではないだろうか。2002年に実施された「就業希望状況調査」によると、15〜24歳の就業者のうち、求職活動を行っている割合は10・5%、25〜34歳では5・8%で、その理由はいまの仕事は「一時的にしている仕事であるため」が最も多く、次いで「自分に向いた仕事に就きたいため」となっている(図表1)。

「自分に合った仕事へのこだわりが、若者

●図表1 求職活動を行っている就業者の求職理由



出所：総務省「就業希望状況調査(平成14年10月・11月期平均)結果表一覧(平成15年3月28日公表)」
 <http://www.stat.go.jp/data/kibou/2002b/zuhyou/02b0201.xls>
 (注)「15~34歳」は就業者。

「正規の職員・従業員」「非正規の職員・従業員」は15歳以上の就業者。

「非正規の職員・従業員」は雇用形態が「パート、アルバイト」「労働者派遣事業所の派遣社員」「契約社員・嘱託」「その他」の合計。

世代の高い離職・転職率に表れている。フリーターも転職も、自分に合った仕事探しのための手段といえよう。変化が激しく複雑な世の中だから「そ」なになが自分に合ったのか」といふツールを探さなければならぬ。「ツールはサバトしてめざすべきもの」といふ上の世代の考えとほだいぶずしがあり、「めざすべきツールを探す」という姿勢を、いわゆるモラトリアムと一言で片づけてしまつたには問題がある。

本稿では若者世代のモラトリアムをとらえ直し、その特徴を探るとともに、自律した個人へ向かつてはなにながが必要なものを考察する。

モラトリアムの質的变化

モラトリアムとは、もともと「支払い猶予期間」を意味する経済用語である。それを社会的責任を猶予された中でさまざまな試みを積み重ね、アイデンティティを獲得するための準備期間」として、青年期の特質を表す概念に転用したのがエリックソンである。高田ほか・1987年、永江・2000年。エリックソンの時代(1950~60年代)、若者は、自分がまだ一人前でないといふ自覚から自立に向けて積極的に努力し、禁欲と葛藤の中で真剣に自分をみつめ、アイデンティティを確立しよう

とする「積極的なモラトリアム」とも考えられた。

マーシャはエリックソンの概念を実証研究するため、職業と価値観における「危機」と「積極的関与」を用い、モラトリアムを「危機の最中で積極的関与をしよう」として迷っているところ、その不確かさを克服しようとする一生涯努力している「期間」と説明した。高田ほか・1987年。

このようなモラトリアムも、戦後、日本社会の成長と発展により、その心理的状態が変容したといわれている。小此木はそれを「モラトリアム人間」と称し、まだどんな職業的役割も獲得していない、すべての社会的かわりを暫定的・一時的なものに見なしている。本当の自分はこれから先の未来に実現されるはずで、現在の自分は仮のものにすぎないと考えている。すべての価値観・思想から自由で、どのような自己選択もこれから先に延期されている。すべての社会的出来事に当事者意識を持たず、お客様意識しか持つとつとない、といふ5つの特質を挙げている(小此木・1978年)。

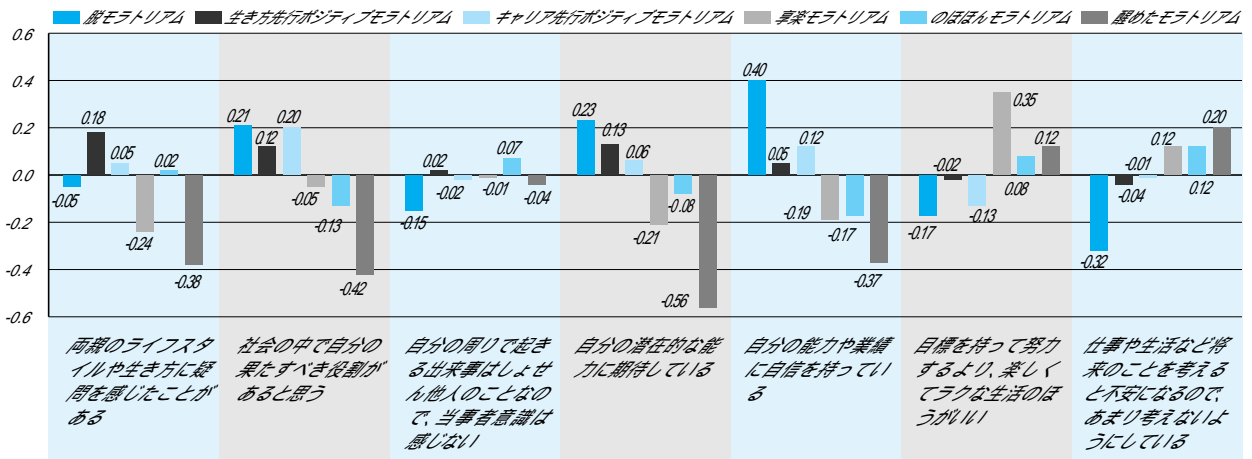
モラトリアムのタイプ論

モラトリアムの変容を参考に、「生き方」

図表 クラスター分析結果と若者世代関連5項目の平均値

			クラスター1 (182人)	クラスター2 (111人)	クラスター3 (112人)	クラスター4 (24人)	クラスター5 (420人)	クラスター6 (46人)	全体 (895人)	
「生き方」 「キャリア」の 決定状況	これまで、どのようなライフスタイルや 生き方が自分に合っているのか 考えたことがありますか		考えたことが あり明確	考えたことが あり明確	考えたことは あるが未定	考えたことは あるが未定	考えたことは あるが未定	考えたこと なし		
	これまで、どのような仕事、職種、 キャリアが自分に合っているのか 考えたことがありますか		考えたことが あり明確	考えたことは あるが未定	考えたことが あり明確	考えたこと なし	考えたことは あるが未定	考えたこと なし		
「4段階評価 を4点として 評価する」と 「そう思わない」と	既存価値の 受け入れ	両側のライフスタイルや 生き方に疑問を感じたことがある	平均値	2.52	2.76	2.63	2.33	2.59	2.2	2.58
			標準偏差	1.13	1	0.97	0.92	0.92	1.11	1
	社会的 かかわり	社会の中で自分の果たすべき 役割があると思う	平均値	3.1	3.01	3.09	2.83	2.75	2.47	2.89
			標準偏差	0.83	0.78	0.71	0.64	0.76	0.89	0.8
	自己に 対する期待や 自信	自分の潜在的な能力に 期待している	平均値	3.07	2.96	2.9	2.63	2.76	2.28	2.84
			標準偏差	0.88	0.8	0.93	0.77	0.79	0.86	0.85
		自分の能力や業績に 自信を持っている	平均値	2.96	2.61	2.68	2.38	2.39	2.2	2.56
			標準偏差	0.86	0.75	0.87	0.71	0.78	0.78	0.83
	将来志向	目標を持って努力するより、 楽しくてラクな生活のほうがいい	平均値	2.19	2.34	2.23	2.71	2.44	2.48	2.36
			標準偏差	0.94	0.95	0.79	0.86	0.77	0.81	0.84
	将来決定の 回避	仕事や生活など将来のことを 考えると不安になるので、 あまり考えないようにしている	平均値	1.9	2.17	2.21	2.33	2.33	2.41	2.21
			標準偏差	0.9	0.92	0.85	0.82	0.79	0.8	0.85

図表 各モトリアムタイプにおける若者世代関連5項目(4段階評価)の特徴(各平均値・全体平均)

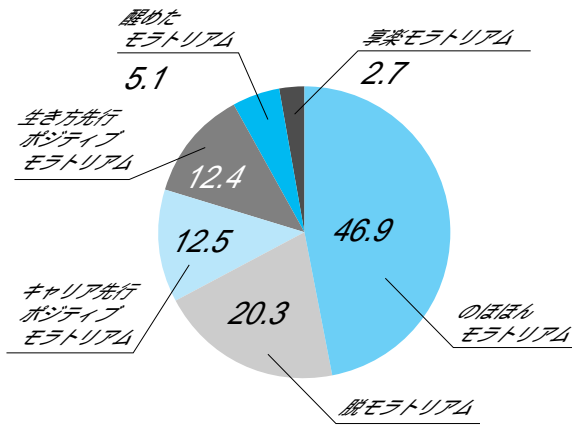


と「キャリア」の決定状況から若者20〜34歳(の類型化を試みた。図表2にそのクラスター分析結果と、各クラスターについていまの若者世代をとらえる5項目、既存価値の受け入れ、社会的なかわり、自己に対する期待や自信、将来志向、将来決定の回避)の平均得点をまとめた。クラスター1は、どのような生き方、キャリアが自分に合っているのか考えたことがあり、希望の方向性が明確なグループである。社会的なかわりには積極的で、自分の潜在能力に期待し、能力や実績に自信がある。将来のことを考え、どちらかという目標を持って努力するタイプであり、モトリアム状態というよりは「脱モトリアム」といえるだろう。

クラスター2は、生き方について明確な方向性を持ち、キャリアを模索しているグループである。既存の価値観に疑問を抱きながら、社会的なかわりの中で自分の役目を意識している。自分の潜在能力に期待しているが、強い自信を持っていない。どちらかという将来のことを考え、目標に向かって努力するタイプで、生き方先行ポジティブモトリアムといえる。

生き方は模索中で、キャリアの方向性が明確となっていないのがクラスター3である。社会的なかわりには積極的で、自分の潜在能力や実績に自信を持っている。将来

図表 若者世代におけるモラトリアムタイプの割合（全体=895）



については、身近に迫った仕事やキャリアに関して具体的な目標を持ち、それに向かつて努力するタイプで、キャリア先行ボジティブモラトリアムと呼べる。

クラスター4は生き方は考えたことがあるが未定で、キャリアについては考えたことがないグループである。既存の価値観に疑問を感じたことがなく、将来についてもあまり考えない。自分の潜在能力には期待しておらず、自信もない。目標に向かって努力するより、楽しくラクな生活を望むタイプで、楽しくラクな生活を望むタイプ

イブで「享楽モラトリアム」といえる。

生き方もキャリアも考えたことはあるが方向性が未定なのがクラスター5である。社会的なかわりにはやや消極的で、自分の能力や実績に自信がない。将来についてあまり考えずにいるタイプで、「のほほんモラトリアム」とした。

クラスター6は、生き方もキャリアも考えたことがなく、方向性も未定なグループである。既存の価値観に疑問を感じたことがなく、将来のことは考えると不安になるので考えず、「どちらか」というと楽しくラクな生活を望む。社会的なかわりに消極的で、自分に対する期待も自信もない「醒めたモラトリアム」といえる。

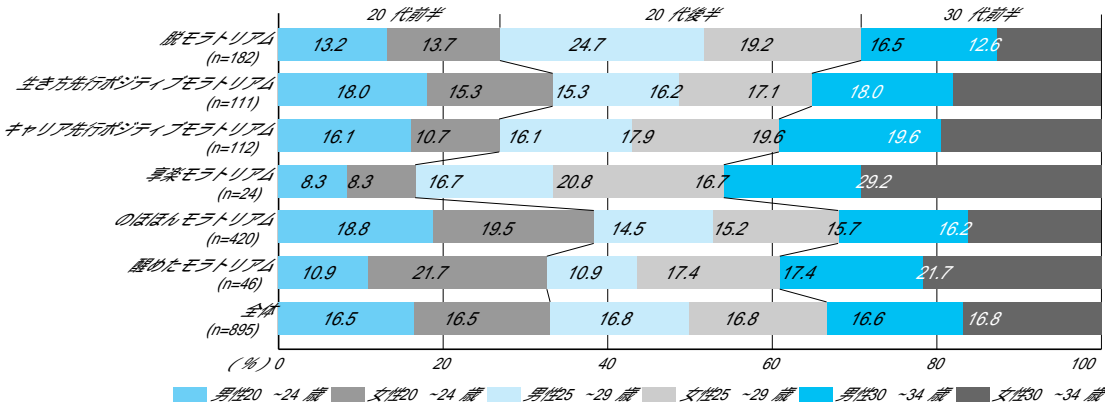
6タイプの人数比率を見ると、最も多いのが「のほほんモラトリアム」で46.9%を占めている（図表4）。次に「脱モラトリアム」が20.3%、キャリア先行ポジティブモラトリアム」生き方先行ポジティブモラトリアム」はともに約12%の割合となっている。「醒めたモラトリアム」「享楽モラトリアム」は数%程度で少数派といえる。

次に、各クラスターの属性と生活観を説明する（図表5・6・7・8）。

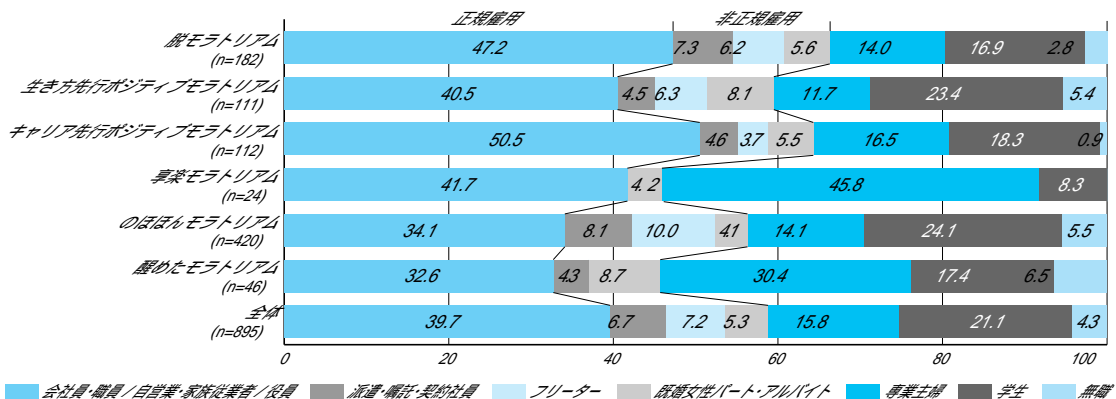
脱モラトリアム

20代後半（25〜29歳）が多く、とくに20代男性が4分の1を占めている。全体と

図表 各モラトリアムタイプの性別・年齢構成



図表 各モラトリアムタイプの職業構成



比べて「会社員・職員／自営業・家族従業員／役員」(以下、会社員)が多く、学生がやや少ない。そのため年収300万以上の割合が大きい。

生活の満足度では満足派が最も多く、将来を不安に思う割合が一番低い。不安理由は「経済的なゆとり」「自分の仕事や職場」「自分の健康」が上位に挙げられている。

現在の生活イメージとして選択されたことばは、全体と比較して「自分らしい」の割合が高く、次いで「自由な」「自然体の」「楽しい」「幸福な」「努力する」が高くなっている。生き方もキャリアも自分に合った方向性が定まり、それに向かって進んでいることが、「脱モラトリアムの、自分らしく充実感のある生活」をもたらしているといえる。

生き方先行ポジティブモラトリアム

性別、年代ともにほぼ均等に分散している。職業の構成は全体の分布とほぼ同じであるが、若干「既婚女性パートアルバイト」が多く、「専業主婦」が少ない。年収300万以上は3割と比較的大きな割合を占める。

生活満足派は半数を超えるものの、将来に対して8割近くが不安を感じている。不安理由には、「経済的なゆとり」「自分の

仕事や職場」「自分の健康」が挙げられているが、「経済的なゆとり」「他のモラトリアムタイプと比べて少ない。

生活イメージについては「自然体の」「幸福な」の割合が高く、生き方について明確な方向性を持っているため、いまの生活が自分にとって自然で幸せなものと感じられている。

キャリア先行ポジティブモラトリアム

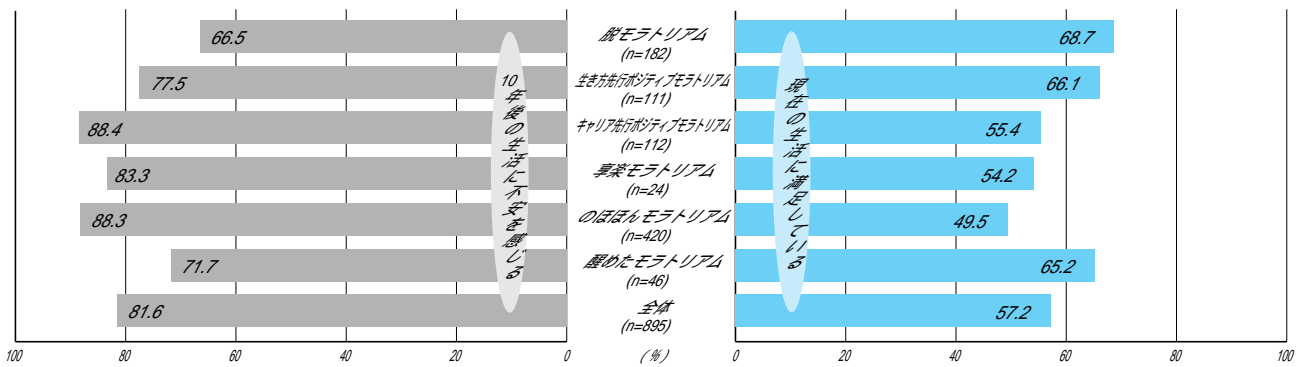
20代後半と30代前半(30～34歳)が多く、20代前半(20～24歳)がやや少ない。「会社員」が半数を占め、「無職」「派遣・嘱託・契約社員」「既婚女性パート・アルバイト」「フリーター」は少ない。年収300万以上は4割と最も多い。

生活不満の割合が高く、将来に対しても9割近くが不安と答えている。不安理由は「経済的なゆとり」「自分の仕事や職場」「親の健康や介護」が挙げられている。

生活イメージでは「自然体の」の割合が低く、「我慢」「努力する」が高くなっている。また、「のんびりした」「自由な」「自分らしい」も全体より低い割合である。

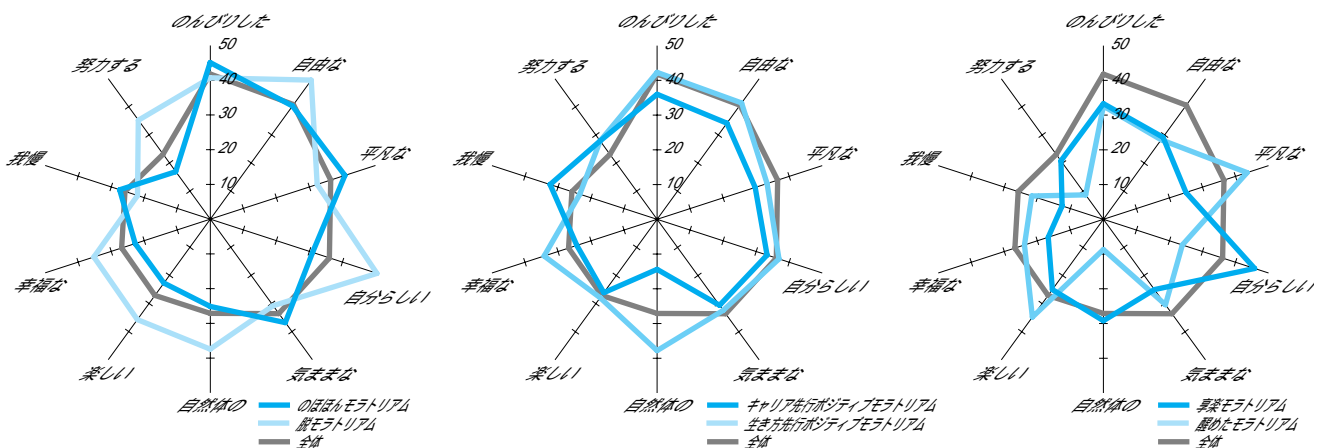
キャリアの方向性が明確となっているため、他と比較して「自分の仕事や職場」を不安とする割合が小さい。しかし、生き方が定まらないままキャリアを追求するため、つねに収入やキャリアをアップさせる

図表 各モラトリアムタイプの生活満足と将来不安



図表 各モラトリアムタイプの生活イメージ

(注)現在の生活イメージ30項目から複数回答。特徴のある上位10項目について選択された割合を表している。



●図表9 モラトリアムタイプの
ロジスティック回帰分析結果

		脱 モラトリアム	生き方先行 ポジティブ モラトリアム	キャリア先行 ポジティブ モラトリアム	享業 モラトリアム	のほほん モラトリアム	醒めた モラトリアム	
人生の転機		自分の就職・人事異動・転職(1=選択,0=非選択)						
4段階評価 「(1)思わない」「(2)あまり思わない」「(3)普通」「(4)思う」「(5)とても思う」	人生設計	人生は人生設計にもとづいて進めるのがよい					-0.823	
	自律度	自律した生き方だと思う		0.602			-0.425	
		一人でも困らない生活能力がある		0.331				
	あきらめ感	経済的に自立した生き方が望ましい				-0.940		
		いくら努力してもダメなことが多い			-0.276			
	将来の夢	将来、実現したい夢がある		0.753	0.427		-0.506	
	居場所	自分には居場所がないと思うことがある		-0.413			0.450	
	つながり	友だちでもプライベートに深入りしない		-0.251		0.702		0.795
		一人ているのが一番好き						-0.417
	学び		1年間に学ぶ活動を行った(1=行った,0=行わなかった)					-1.587
属性	既婚(1=既婚,0=未婚)						-0.416	
	子どもあり(1=子どもあり,0=子どもなし)				1.726			
	300万-500万円未満(1=選択,0=非選択)				0.687			
定数		-4.898	-2.630	-2.120	-3.592	1.227	0.555	

分析方法:ロジスティック回帰分析の変数増減法ステップワイス(尤度比) 有意水準 $p < 0.05$
 方程式中の変数:人生の転機は「肉親など親しい人の死」「友だちとの対立」「自分の受験・就学・卒業」「自分の恋愛・失恋」「自分の海外留学」「自分の独り暮らし」「自分の転地・引越」「自分の退職」「自分の結婚」「子どもの誕生」「自分の病気・怪我」、自律度は「他者に頼らず自立した生き方を望む」、性別役割「家事・育児は夫婦が半々で分担すべき」、つながりは「いろいろなネットワークを持っている」、資格は「資格あり」、属性は「年齢」「会社員・職員/自営業・家族従事者/役員」「派遣・嘱託・契約社員」「既婚女性パート・アルバイト」「フリーター」「専業主婦」「学生」「無職」「収入なし」「100万円未満」「100万-300万円未満」「500万円以上」

「こと」に追われているようである。それは仕事やキャリアのために自由や自己を犠牲にしていると感じている生活イメージに反映されている。

享業モラトリアム

20代前半が少なく、20代後半以上が多数を占める。中でも、20代後半女性と30代前半女性が多い。全体と比べて「専業主婦」が多く、学生が少ない。また、「派遣・嘱託・契約社員」が少ないのが一つの特徴といえる。年収300万以上は他と比べてやや低い割合となっている。

生活不満の割合がやや高く、将来を不安とする割合も大きい。将来不安の理由には、「経済的なゆとり」「育児・子どもの教育」「親の健康や介護」が挙げられ、とくに「経済的なゆとり」は他と比べて大きな値である。20代後半以上の女性「専業主婦」が多いことから、育児や親の介護に対する不安が上位に入ってきている。

現在の生活については、「自分らしい」と考える割合が高く、「自由な」「幸福な」「我慢」が低い。楽しくてラクな生活を望む享業モラトリアムであるが、高い自由度や幸福感が見られない。

のほほんモラトリアム

20代前半が多く、4割近くを占めている。

全体と比較して、会社員の割合が少なく、「学生」「フリーター」「派遣・嘱託・契約社員」が多い。年収300万以上の割合は少ない。

生活不満が半数を超え、モラトリアムタイプの中で最も多い。将来を不安に感じる割合も9割近くと大きい。不安の理由には、「経済的なゆとり」「自分の仕事や職場」「自分の健康」に続いて「恋愛・結婚」が挙げられている。

生活イメージでは「のんびりした」「平凡な」「気ままな」がやや高い割合で、「努力する」が低い。

社会に出たばかりの20代前半が多く、不安定な雇用形態で働く割合が高いため、仕事や職場に対する不安が大きく表れている。しかし、実際の生活を努力して改善するというよりも、不安定ではあるが自由な状況をのんびり、気ままと楽観的にとらえている。

醒めたモラトリアム

20代前半女性と30代前半女性が大きな割合を占めている。全体の分布に比べて、「会社員」が少なく、逆に「既婚女性パート・アルバイト」と「専業主婦」が多い。「無職」も若干多いが、「フリーター」が少ない。年収300万以上の割合は、モラトリアムタイプの中で最も少ない。

各モラトリアムタイプが抱える課題	その課題に対する処方せん
生き方先行ポジティブモラトリアム 就職・異動・転職が自分の生き方にマッチしない	イ対個人 生き方をフレキシブルに考え、とらえ直す イ対社会 個人の生き方に合った仕事、職場、働き方を開発する
キャリア先行ポジティブモラトリアム 高収入の仕事、キャリアアップばかりに注力し、バランスに欠ける	イ対個人 生き方やライフプランを考える イ対個人 仕事以外の活動、居場所、自分を活かす場をつくる 仕事やキャリアの壁を乗り越えるのに役に立つ
真楽モラトリアム 経済的に自立できない 表面がなつきあい	イ対個人 自分を活かし、貢献できる社会的つながりをもつ 社会的つながりにコミットすることで責任感、自信が持てる イ対社会 職業をうながす再教育の機会をつくる キャリアを考えられるようになるだけでなく、社会的つながりも広がる
のほほんモラトリアム 自律した生き方と思えない 夢がない、もてない 居場所がない グループばかりのつきあい	イ対個人 仕事以外の活動、居場所、自分を活かす場をつくり、社会的ネットワークを広げる 仕事以外のところで自分を活かすことができるという発見が自信につながる イ対社会 将来の生き方やキャリアを考える機会をつくる
醒めたモラトリアム 人生は計画通りではないし計画通りにならない/行き当たりばったり 夢がない、もてない 表面がなつきあい 学習活動などに参加しない	イ対個人 生き方やライフプランを見直し、つくりかえる必要性を納得できるようにする イ対個人 仕事以外の活動、居場所、自分を活かす場をつくり、社会的ネットワークを広げる イ対社会 将来の生き方やキャリアを考える機会をつくる

生活満足派が6割強 将来を不安に思うのは7割近くである。不安理由には「経済的なゆとり」「自分の仕事や職場」「親の健康や介護」が挙げられ、会社員が少ないため、他と比べて、自分の仕事や職場の割合が小さい。

生活イメージでは全体と比較して平凡な「楽しい」を選ぶ割合が高く、自然体の「努力する」の割合が低い。

正社員としてキャリアをめざしているわけではなく、少しの収入でのんびり自由な生活は楽しいが自分にとってどこが自然でないと感じているようである。

モラトリアムタイプを決定する要因

このようなモラトリアムタイプはなにによって決定されるのだろうか。過去の経験やいまの生活、価値観などの項目を用いて、モラトリアムのタイプごとに回帰分析を行った(図表9)。

脱モラトリアムであることを決定つける項目としては、「将来の夢」「自律した生き方」「生活能力」がプラスの効果、「居場所がない」「プライベートに深入りしない」がマイナスの効果を発揮している。将来、実現したい夢があり、一人でも困らないだけの生活能力を身につけ、自律した生き

方だと思えることが脱モラトリアム化を進めている。また、うわべだけの交友関係に終わらず、自分の居場所を感じられる社会的つながりを持つことも脱モラトリアムを決定つける要因となっている。

生き方先行ポジティブモラトリアムについては、「将来の夢」がプラスの効果、「就職・異動・転職」がマイナスの効果、「収入」がプラスの効果、「努力すればなんとかなる」と思えることがこのモラトリアムタイプを決定している。自分に合った生き方がはつきりしているため、就職や異動、転職によってその生き方が実現できなくなると、生き方先行ポジティブモラトリアムではなくなってしまう。

キャリア先行ポジティブモラトリアムは年収が300〜500万円であることが決定要因となっている。

享楽モラトリアムでは、経済的自立が望ましいがマイナスの効果、「プライベートに深入りしない」がプラスの効果となっている。

のほほんモラトリアムは、自律した生き方「将来の夢」「既婚がマイナス効果」「居場所がない」「グループ交際」がプラス効果を示している。将来、実現したい夢がなく自律した生き方だと思えないことがまた友だちとはグループで会つのを好み、自分

の居場所が感じられない希薄な関係の中にいることが将来が定まらず模索している状態を引き起こしている。

醒めたモラトリアムについては、人生は計画通りにいかない、あるいは人生行き当たりばったりでもよいという意識や、将来の夢を持てずにいることが影響している。社会的なつながりでは、一歩踏み込んだ友だちつきあいをせず、なにかを学ぼうという活動にも積極的でないことが、将来を考えたことがないという醒めたモラトリアムの状態をもたらしている。

自律時代のモラトリアム

自律した生き方への処方せん

いまの若者の類型化を行ってみて、モラトリアムを脱した若者が2割も存在し、上の世代が憂うような享楽型や醒めたモラトリアムが少数派であることが分かった。このことは、将来を担う若者世代に大きな期待ができるという意味で非常に心強い。しかし、多くの若者は生き方もキャリアも模索中の状態にある。そこで、これまでの分析結果をもとに、モラトリアムのタイプごとに自律した生き方への処方考えてみた(図表10)。

享楽モラトリアムののほほんモラトリアム、醒めたモラトリアムには共通する課題

がある。それらをまとめると、経済的な自立、夢づくり、社会的ネットワークの拡大が挙げられる。

自律した生き方には、まず経済的な自立が必要となる。しかも、ただ雇用を確保するだけでなく、さまざまな経験を積める仕事や職場働き方を開発しなければならぬ。企業が初期の人材育成に投資しなくなっていることから、インターンシップなど職場経験を通じて仕事に必要なスキルや能力を身につけられるチャンスはとも重要である。また、いまの若者を惹きつけ、やる気を引き出すには、目標を設定して地道に努力するよつな仕事のしくみよりも、いまの課題をゲーム感覚で楽しみながら取り組むことができ、しかも働きたいややりがいを感じられるように仕事のプロセスを工夫する必要がある。

「夢がない、持てない」という状況は閉塞感をもたらしく、将来の選択にさまざまな弊害をもたらすと考えられる。将来実現したい夢がある」と関連のある項目を見ると、「社会の中で果たすべき役割がある」(相関係数0.34)、「自分にしかできないことをしていきたく」(0.33)、「自分の潜在能力に期待している」(0.33)がある。

将来の夢を持つには、自分を活かせる場で役割意識を感じ、自分の存在意義を高めることが重要といえる。自分が活躍でき

る場合は、居場所のある安心感役に立ち役割を果たすといつ有用感や責任感をもたらしく、自分の生き方に対する自信を高めてくれる。そして、そのような社会的つながりは、家族や友だちといつ枠を超え、社会的ネットワークを広げることによって発掘できるのである。家族や友人といつ親しいが小さな関係性の限界を認識しなければならぬ。

繰り返されるモラトリアム状態

2003年8月末、「若者自立・挑戦プラン」内閣府、経済産業省、厚生労働省、文部科学省」の具体策がまとめられ、若者の雇用問題が国家的課題として明確に位置づけられた。働くことへの意識改革、カウンセリング、インターンシップ、専門教育の整備、創業支援などで構成され、若者の職業やキャリアの選択をサポートすると期待されている。

しかし、これから先、変化の激しい社会を生き抜かなければならぬ若者世代にとつて、生き方やキャリアを選択する機会は一回到り終わらない。社会の多様さや変化のスピードはゆるむことがなく、それに合わせて生き方やキャリアを修正、転換していかなければならぬからである。転職や職種転換などはその一例である。転職で重視される専門性も、最近では一つでは

なく、複数求められるよつになつていく。

以前と違って、会社も人生も一度決まれば一生同じで済むといつわけにはいかない。時代や社会のT字、そして個人の成長に合わせて、生き方やキャリアを選択・決定する機会が何度も訪れる。これまでのモラトリアムは、社会的責任を猶予された中で自分らしさを確立する」といふ青年期の一時期とされてきた。しかし、これからの若者世代では、モラトリアムに似た状態が一生のうち幾度となく繰り返されるだろう。日々の雑事に流されず、自己を見つめ、自分らしい生き方をするために、これまでを振り返り、次のステップを模索し、決定するための期間が必要なのである。

「若者自立・挑戦プラン」は、中高年者の雇用対策と一線を引く意味で、「若年」に限定されている。しかし、若者世代が将来繰り返すモラトリアム状態までは考慮されていない。将来の方向性が定まらない若者を定職に就かせ、社会に放出してしまえばよいといつ、一時しのぎの政策に感じられる。一度社会に出た若者や家族を持つ若者が、仕事や生活を考え直し、リカレントして職種転換、転職するリスクについては、十分な支援策がなされていない。仕事や生活のビジョンを見直す機会、転職や職種転換が不利にならない雇用システム

【参考文献】

- 日本労働研究機構「調査研究報告書No.89 高卒者の初期キャリア形成と高校教育 初期職業経歴に関する追跡調査結果」(1996年)日本労働研究機構
- 内閣府「平成15年版国民生活白書」(2003年)(株)ぎょうせい
- 永江誠司「男と女のモラトリアム」(2000年)ブレン出版
- 高田利武、丹野義彦、渡辺孝憲「自己形成の心理学 青年期のアイデンティティとその障害」(1978年)川島書店
- 小此木啓吾「モラトリアム人間の時代」(1978年)中央公論社

専門性やそれを活かした職場経験を身につけられる教育機関、リカレントする期間の生活保障などの整備がこれからの課題となるだろう。若者世代の繰り返されるモラトリアム状態をスムーズに解決することが、これからの個人と社会の成長をもたらすといえる。

若者の豊かな つながりとは

山縣いつ子 HRI 研究員

REPORT

若者の人間関係は希薄か？

若者の人間関係は一般的に、地域や学校、家庭など、彼らを取り巻く社会環境の変化によって、「希薄である」「浅く広い」「場面によって友だちを分ける」などと語られることが多い。しかし、実際に彼らの人間関係は希薄なのだろうか。友だちを多く持ちながら、互いに深くはつきあわないのか。友だちとは部分的なつながりしか求めていないのか。そして、そこではなにか問題になっているのだろうか。

4つのクラスターとその特徴

「友だち」に関する8つの質問から、「つながりの多・少」「安定・不安定」「選択性」「関心」の軸を見出し、それによって4つの

クラスターに分けてみた(図表1)。各クラスターの属性については、図表2、年齢5歳

区分・性別(3)と職業(4)、未既・既婚の割合(5)の通りである。また、図表5では、それぞれのクラスターについて、「友だち関係」「生活の現状と将来の意識」「仕事への意識」における特徴をまとめている。

以上をもとに、各クラスター像を描いてみた。

「多つながり関係不安定」

このクラスターは、ネットワークを多く持つっており、友だちに対してつねにつながりを求めている一方、友だちつきあいが面倒、と思う面もあり、関係が安定していない。それは、図表6の「生活の楽しみ」の中で、「友だちつきあいを最も多く挙げている反面、10年後の不安の理由(図表7)に「友人関係」を挙げていることからもつかえる。これは、彼らが友だちとの距離感を

をどのようにとじていいかわからない迷いの表れなのかもしれない。また、将来の希望と転職希望からは、仕事に対する焦燥感と不安が感じられる。20代前半が多く、まだ社会に出ていない層も含まれることから、自分の将来への不安や、数多い友だちとのそれぞれの不安定な距離に対する落ち着きのなさがうかがえる。

「多つながり関係安定」

このクラスターは、ネットワークを多く持つっており、つながりに対する不安が少なく、友だちとオープンな気持ちでつきあうことのできるバランスのとれたタイプといえる。生活、仕事の満足度も高い。「生活の楽しみ」の上位に「友だちつきあいを挙げているが、自分の趣味などを充実させることにも関心が高い。また、仕事と生活のバランスを保ち、将来の希望として、経済的な豊かさよりも自分の成長などに焦点をあてている。このことから、「仕事」だけが自分を幸せにするのではなく、生活を充実させることを大切にしているといえる。広い友だちのネットワークを持ちながらも、相手との距離を確立しているのは、30代前半が多く、結婚し家庭を持つ人が含まれているから、ということも考えられる。

「少つながり関係割り切り」

このクラスターは、ネットワークはそれほど多くはないが、友だちとのつながりに対して不安を抱いていない。また、友だちつきあいが面倒と感じているが、とくに決まった友だちと行動するわけでもない。現在の生活や将来の希望には、実利的なものを求める傾向が強い。転職希望や転職経験が多く、仕事に対してはドライな面

図表1 クラスターの特徴

			つながりの多・少	つながりの安定・不安定	つながりの選択	つながりの固定
多つながり関係不安定	241	27.2	ネットワークを多く持っている	友だちとはなにかの方法でつながっていないと不安である一方、友だちつきあいが面倒という気持ちもある。互いにプライベートなことは話さない	場面によって遊ぶ友だちを分けている	グループでの行動を好み、決まった友だちと行動する傾向もある
多つながり関係安定	290	32.7	ネットワークを多く持っている	つながりに対する不安もなく、友だちとは機動がずらつきあう	場面によって遊ぶ友だちを分ける傾向にある	とくに決まった友だちとは行動しない
少つながり関係割り切り	182	20.5	ネットワークは多いとはいえない	つながりに対する不安はないが、友だちつきあいが面倒と思うことがある	場面によって遊ぶ友だちを分ける傾向にある	決まった友だちと行動することはない
少つながり関係固定	173	19.5	ネットワークは少ない	つながりに対する不安はないが、友だちつきあいが面倒と思うことがある	場面によって遊ぶ友だちを分けない	決まった友だちと行動する

図表 図表からみるクラスターの特徴

多つながり関係不安定

生活の楽しみの中で、友だちとのつきあいが一番楽しいと感じ、普段つきあう友だちも幅広い(図表6・8)
 生活には満足しており、「自由で楽しい」イメージを持っていく(図表0・12)
 10年後の生活に対する不安は強く、その理由として経済が豊かや仕事、恋愛・結婚などが以上に、9番目に「友人関係」も挙がっている(図表7・11)
 将来は幸せな家庭を築くことを第一として考えているが、仕事での成功や経済的に豊かになることを望んでいる(図表13)
 転職意向は高い(図表7)

多つながり関係安定

生活においては、友だちつきあいを楽しみにしており、つきあいの幅も広い(図表6・8)
 生活に対する満足度が高く、「自由で自分らしい」イメージを抱いている(図表0・12)
 将来の理想の生き方として、幸せな家庭を築くこと、のんびり暮らしたいという気持ち以外に、好きなことに打ち込んだり、目標に向かって努力することを望む(図表3)
 仕事生活も満足しており、収入のために仕事をすることが第一の目的であるが、自分の夢を実現したり、スキルアップをめざしたいといった気持ちもある(図表4・15)
 仕事と生活のバランスを保ちたいと思う気持ちが強い(図表6)

少つながり関係割り切り

友だちつきあいの幅はそれほど狭くはないが、中にはつきあいをほとんどしない人もい(図表8)
 友だちに対しては、自分とは異なった考え方をしていると思う気持ちが強く、刺激を求めたり、憧れ感はあるものの、ときにはわずらわしさを感じている(図表9)
 「自由で自分らしい」という生活イメージを持ちながらも、「我慢」という気持ちも強い(図表2)
 将来の生き方としては、幸せな家庭を築く、のんびり暮らしたいという気持ちのほか、好きなことに打ち込んだり、豊かや経済状況を望む気持ちもある(図表3)
 収入のために働いているが、社会経験を積む、キャリアを持つという実務的な目的を持っている(図表15)
 転職経験は多い(図表7)

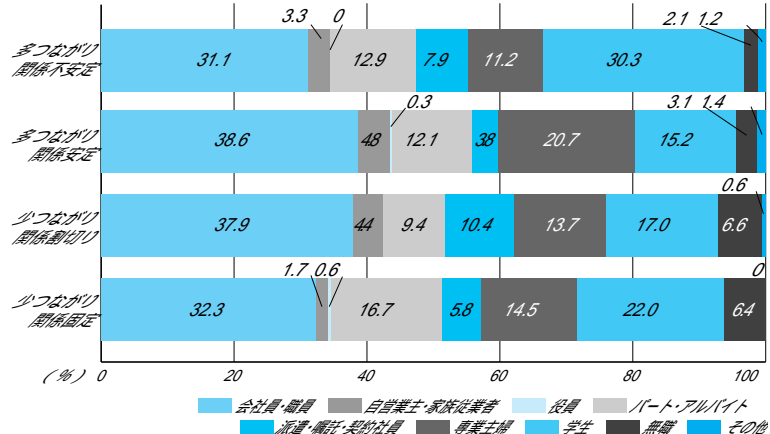
少つながり関係固定

友だちつきあいの幅もそれほど広くはなく、学生時代や職場の友人が圧倒的に多い。中にはつきあいがほとんどない人もい(図表8)
 つきあっている友だちには安心感を感じている(図表9)
 生活は、平凡で、のんびりというイメージを持つ(図表2)
 将来の生き方は、幸せな家庭を築く、のんびり暮らすということのほか、好きなことに打ち込む、お金持ちになる、仕事で成功するという希望を持つ(図表3)
 仕事は、収入のためという気持ちが強い(図表15)
 転職経験も少なく、今後も転職する気がないという気持ちが強い(図表7)

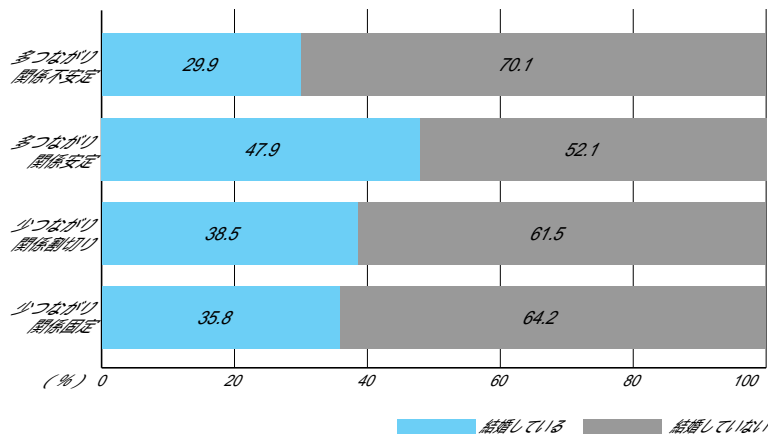
図表 年齢・歳区分・性別



図表 職業



図表 未婚・既婚の割合



もつかがえる。これは契約や囑託派遣などの職業が多いことにも表れている。さらに友だち関係でいえばつきあいの幅はそれほど狭くないのだが、中にはほとんどつきあいのない人もいる。ときには、友だちつきあいがわずらわしいと考えていることから、友だち関係にはそれほど関心を寄せず、割り切つて考えているタイプだといえるだろう。

「少つながり関係固定」

このクラスターは、ネットワークが少なく、友だちつきあいに對して面倒と思うところもある。場面によつて友だちを分けることはなく、固定された友人関係を持つ。彼らは、生活の中で自分のやりたいことを最優先にしたいという気持ちが強い。

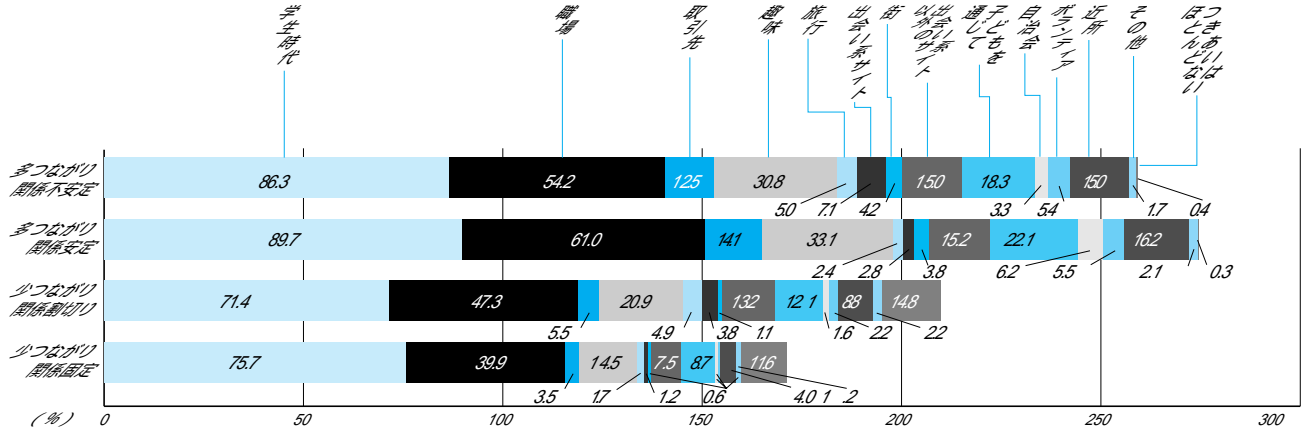
図表 生活の楽しみ(MA)

	多つながり関係不安定 %	多つながり関係安定 %	少つながり関係割り切り %	少つながり関係固定 %
1位	友だちつきあい 66.3	パソコン・インターネット 66.1	パソコン・インターネット 72.5	パソコン・インターネット 66.5
2位	パソコン・インターネット 62.5	友だちつきあい 61.6	テレビ・ラジオ 47.8	テレビ・ラジオ 53.2
3位	テレビ・ラジオ 57.9	テレビ・ラジオ 51.6	外食 39.6	外食 45.7
4位	外食 56.3	映画・芸術鑑賞 50.5	国内旅行 39.6	国内旅行 38.7
5位	映画・芸術鑑賞 52.1	外食 50.2	映画・芸術鑑賞 37.9	映画・芸術鑑賞 38.2
6位	ショッピング 49.2	国内旅行 49.8	ショッピング 37.9	読書 37.0
7位	国内旅行 47.1	家族の団らん 41.9	読書 35.2	友だちつきあい 36.4
8位	お酒 41.7	ショッピング 40.8	友だちつきあい 33.0	ショッピング 34.1
9位	ドライブ 33.3	お酒 35.6	家族の団らん 30.2	家族の団らん 33.5
10位	家族の団らん 32.5	読書 32.2	ドライブ 25.8	テレビ・パソコンゲーム 28.3

図表 10年後の不安の理由(LA3)

	多つながり関係不安定 %	多つながり関係安定 %	少つながり関係割り切り %	少つながり関係固定 %
1位	経済的なゆとり 60.0	経済的なゆとり 60.1	経済的なゆとり 62.3	経済的なゆとり 65.6
2位	自分の仕事や職場 53.2	自分の仕事や職場 53.7	自分の仕事や職場 50.0	自分の仕事や職場 50.0
3位	恋愛・結婚 32.7	自分の健康 33.9	自分の健康 42.5	自分の健康 35.7
4位	親の健康や介護 30.7	親の健康や介護 31.2	恋愛・結婚 28.8	親の健康や介護 29.2
5位	自分の健康 30.2	育児・子どもの教育 25.7	親の健康や介護 26.7	恋愛・結婚 21.4
6位	住居や生活拠点 14.6	恋愛・結婚 22.9	育児・子どもの教育 17.8	育児・子どもの教育 18.2
7位	育児・子どもの教育 13.7	配偶者の健康 15.6	配偶者の健康 12.3	配偶者の健康 15.6
8位	配偶者の健康 11.2	住居や生活拠点 15.6	住居や生活拠点 11.0	住居や生活拠点 13.6
9位	友人関係 8.3	配偶者の仕事や職場 8.3	家族関係 8.9	友人関係 7.1
10位	配偶者の仕事や職場 7.8	妊娠出産 6.4	配偶者の仕事や職場 8.2	配偶者の仕事や職場 6.5

図表 普段つきあっている友だち(MA)



しかし、そう言いながらも、仕事については保守的な面も浮かがる。友だち関係については少ない固定された友人関係を好み、友だちに対しては「安息感」を最も強く感じていることから、その相手と落ち着いたつきあいをしているのである。生活スタイルや友だち関係、仕事など、等身大の自分を把握しており、あまり冒険せず、自分の中で納得していることという気持ちがあるように思われる。

クラスター間の比較

以上、それぞれのクラスター像を述べてきたが、ここではそれを踏まえたうえで、「友だち関係」「生活の現状と将来の意識」「仕事への意識」について、それぞれのよな違いがあるのか、各クラスター間で比較を行う。

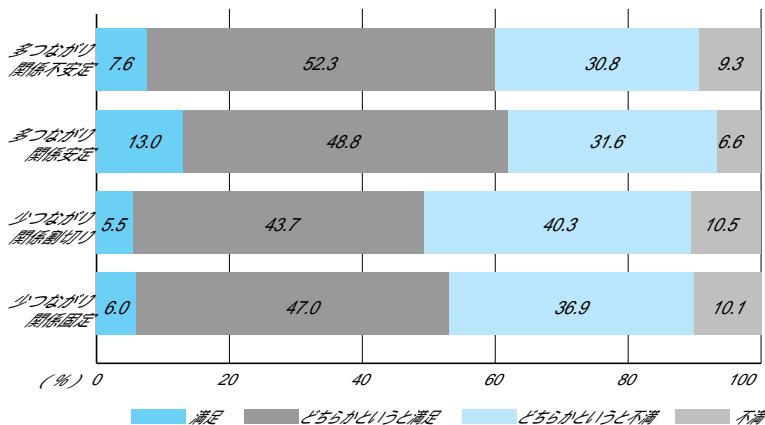
友だち関係

ネットワークが多いほど「楽しみに」普段つきあっている友だちは、各クラスターとも学生時代の友人や、職場、趣味の友だちが多いようだ。やはり、多つながりの2つのクラスターは、交友関係がさらに幅広い(図表8)。この2つのクラスターは、生活の中での楽しみでも、友だちつきあいを優先させている(図表6)。しかし、

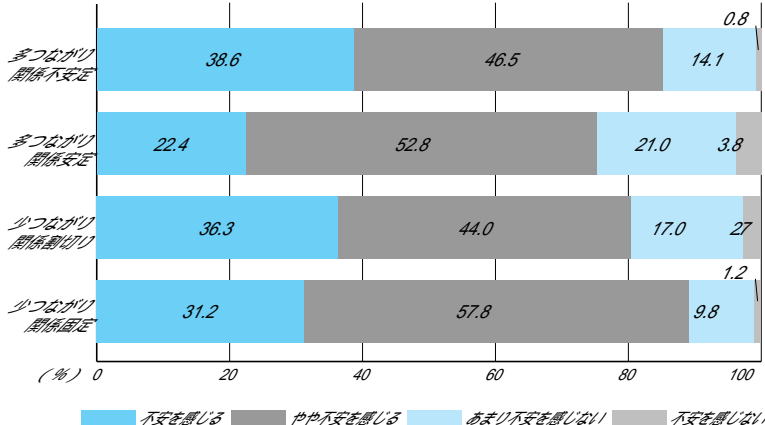
図表9 友だちといて一番感じること

	多つながり関係不安定 %	多つながり関係安定 %	少つながり関係割り切り %	少つながり関係固定 %
1位	信頼感 16.2	刺激 19.3	異なった考え方 19.2	安んずる感 19.7
2位	異なった考え方 14.1	充実感 15.9	刺激 18.1	異なった考え方 11.6
3位	安んずる感 14.1	同じ考え方 12.1	同じ考え方 12.1	刺激 14.5
4位	同じ考え方 13.3	信頼感 12.1	信頼感 8.8	信頼感 14.5
5位	刺激 12.9	安んずる感 11.7	安んずる感 8.8	充実感 12.7
6位	充実感 12.0	絆 10.0	充実感 6.0	同じ考え方 7.5
7位	絆 10.8	異なった考え方 7.9	わずらわしさ 4.9	絆 7.5
8位	尊重 1.7	(友だちから助けられる) 3.1	とくに何も感じない 4.9	とくに何も感じない 3.5
9位	(自分が友だちに) 対える 1.7	(自分が友だちを) 助ける 2.8	絆 4.4	尊重 1.7
10位	(自分が友だちを) 助ける 1.2	尊重 2.4	尊重 2.7	わずらわしさ 1.7

図表10 生活満足度



図表11 10年後の不安



友だちといて感じることに違いがあるようだ。図表9で見ると、「多つながり関係安定」は、友人に「刺激」「充実感」「同じ考え方」を感じているが、「多つながり関係不安定」は、「信頼感」「異なった考え方」「安んずる感」を感じている。

「少つながり」の2つのクラスターを見ると、「少つながり関係割り切り」は「少つながり関係固定」よりも、幅広く友だちとつきあっている。しかし、それほど生活の中で友だちつきあいを優先させているわけでは

はない。他のクラスターに比べ、友だちに「わずらわしさ」を感じている率も高い。

生活の現状と将来の見通し
不安の少ない「多つながり関係安定」

図表10によると「少つながり」の多いことが生活の満足度につながっている傾向が見られるが、将来のこととなるとそうもいえないようである。

「同図」で「満足」「どちらかという満足」を合計して考えた場合、「少つながり関係

割り切り」以外は、5割以上が生活に対して満足していることがわかる。また、比較的生活満足度が高いのは、「多つながり」の2つのクラスターであることがわかる。一方、10年後の不安を見ると、図表11「不安を感じる」「やや不安を感じる」を合わせて全クラスターの7割以上が将来に不安を感じている。中でも、「多つながり関係不安定」「少つながり関係固定」の不安が高い。

「多つながり関係不安定」は現在の生活を自由気ままに楽しんでいるが(図表12)「将来は結婚や家庭をつくるなどのライフステージへの不安が大きく(図表7)経済的に大きく安心を得たい」という希望が見られる(図表13)。

「多つながり関係不安定」は現在の生活に満足し、将来的な不安も他のクラスターに比べると少ない。自分らしく生きている自覚があり、将来の目標に向かって努力したいという前向きな姿勢も見られる。

対して、「少つながり関係割り切り」は、生活の満足度が低く、生活イメージでは自由に自分らしく生活しているとしながらも、「我慢」を挙げる人の比率が高い。また、将来については、仕事や経済的な安定を強く求めている。

同じく現在の生活イメージで上位に「我慢」が挙がっていた「少つながり関係固定」

図表2 生活のイメージ(MA)

	多つながり関係不安定 %	多つながり関係安定 %	少つながり関係割り切り %	少つながり関係固定 %
1位	のんびりした 45.2	自由な 44.8	自由な 40.3	平凡な 45.7
2位	自由な 41.5	のんびりした 43.1	自分らしい 37.6	のんびりした 39.9
3位	平凡な 37.3	自分らしい 42.1	のんびりした 37.0	気ままな 33.5
4位	気ままな 36.9	楽しい 37.9	平凡な 37.0	自由な 32.4
5位	自分らしい 32.8	気ままな 33.8	我慢 32.0	我慢 31.8
6位	楽しい 27.4	自然体の 32.1	気ままな 29.8	自分らしい 29.5
7位	自然体の 25.7	幸福な 31.7	自然体の 26.0	幸福な 26.0
8位	幸福な 25.3	平凡な 31.4	努力する 23.8	落ち着いた 24.3
9位	我慢 24.5	努力する 25.9	幸福な 22.1	自然体の 21.4
10位	落ち着いた 23.2	個性的な 22.4	落ち着いた 22.1	努力する 20.2

図表3 理想の生き方

	多つながり関係不安定 %	多つながり関係安定 %	少つながり関係割り切り %	少つながり関係固定 %
1位	幸せな家庭生活を築く 42.7	幸せな家庭生活を築く 41.7	幸せな家庭生活を築く 31.5	幸せな家庭生活を築く 32.4
2位	のんびり暮らす 12.0	のんびり暮らす 15.9	のんびり暮らす 21.0	のんびり暮らす 22.5
3位	お金持ちになる 9.1	好きなことに打ち込む 10.3	好きなことに打ち込む 11.0	好きなことに打ち込む 12.7
4位	仕事で成功する 7.9	目標に向かって努力する 5.9	お金持ちになる 9.9	お金持ちになる 7.5
5位	好きなことに打ち込む 6.2	仕事で成功する 5.2	安定した仕事に就く 5.5	仕事で成功する 6.4
6位	専門的な知識・スキルを身につけた人材になる 5.0	お金持ちになる 4.5	専門的な知識・スキルを身につけた人材になる 5.5	目標に向かって努力する 4.6
7位	安定した仕事に就く 4.1	周囲の人を幸せにする 3.4	仕事で成功する 4.4	安定した仕事に就く 3.5
8位	目標に向かって努力する 3.3	専門的な知識・スキルを身につけた人材になる 3.1	その他 3.3	周囲の人を幸せにする 2.3
9位	社会のために役立つ 2.9	社会のために役立つ 2.8	目標に向かって努力する 1.7	とくに考えていない 2.3
10位	周囲の人を幸せにする 2.5	その他 2.8	社会のために役立つ 1.7	社会のために役立つ 1.7

は将来に対する不安も強い。しかし将来的に好きなことに打ち込みたいという気持ちだが、他のクラスターより強いことから等身大の自分を自覚しつつ、好きなことで成功を収めたいという傾向が見られる。

仕事への意識

特徴が出た「少つながり」クラスター

仕事生活の満足度(図表14)、「働く理由(図表15)をクラスター」に見比べてみると、「多つながり」2クラスターは、「少つながり」2クラスターに比べ、仕事に対する満足度が高い。働く理由として、「いずれのクラスターも、収入を確保するため」という理由が最も多いが、「多つながり」2クラスターに比べると、「少つながり」2クラスターで「こう回答している人の比率が高い。このことから、つながりが多いか少ないかは、仕事への満足度につながっているとも考えられる。

仕事と個人の生活におけるバランスでは、いずれのクラスターにも大きな偏りは見られないが、「多つながり関係安定」は、仕事と生活半々が39・3%と最も高く、他のクラスターに比べ、生活と仕事のバランスをとっている人の割合が高かった(図表16)。

転職経験では、「少つながり関係割り切り」が他のクラスターに比べて高く、とくに「転職経験は3回以上ある」が15・6%を

占めている(図表17)。また、「多つながり関係不安定」は、転職経験1回「転職経験2回」の合計が他のクラスターに比べて高い。このクラスターは比較的若い社会人が多いので、短期間の間に転職を経験しているのではないかと思われる。逆に、「転職経験はなく、今後もしもそのつもりはない」と回答しているのは、「少つながり関係固定」に多く、35・2%と4クラスター中最も高くなっている。転職に関してこのクラスターは他のクラスターに比べ保守的だといえるだろう。

不安につながる居場所のなさ

ヤング世代のつながりについて、4つのクラスターを通じて見てきたが、実際に4つのクラスターの中で最も人数が多かったのが「多つながり関係安定」である。彼らは、友だちとの距離をしっかりと保ち、安定した関係を築いている。また、生活満足度や仕事に対する意識も高い。若者の多くは、そのような安定した関係を築いているとはいえない。

しかし、確かに、他のクラスターの特徴に見られるように、つながりには不安や割り切った気持ちを持つ若者世代もいる。いつたいなにが問題になっているのだろうか。

「多つながら」が必ずしも幸せではない

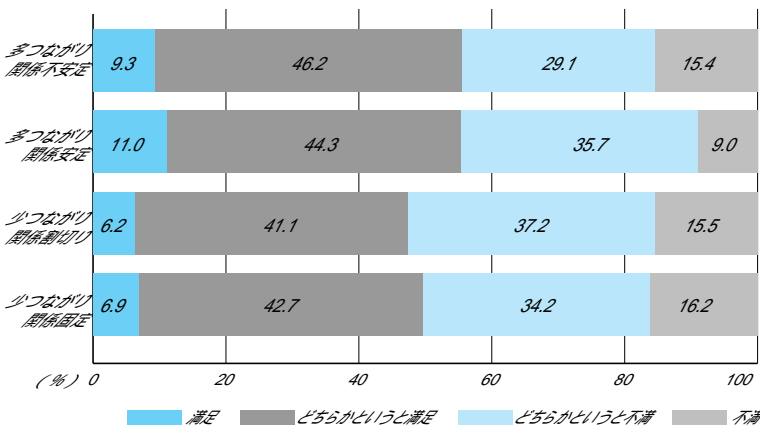
自分の将来やいまの立場を確認するとき、他の人々との関係は若者世代でなくとも大切なことであろう。そのような他の人々との関係の中で見出されるのが「一つの居場所」であると考えられる。そこで彼らの居場所に対する意識を探ってみた。「自分には居場所がないと思うことがあろうの問いに対して」「そう思う」「どちらかというとそう思う」の合計は、「多つながら関係安定」以外はほぼ5割に達している(図表18)。「多つながら関係安定」以外のクランスターに属する人の約半分が、「居場所がない」感覚を味わっていることになる。同じ「多つながら」のクランスターである「多つながら関係不安定」との間に見られるこの差は、「多つながら関係不安定」が抱えている友だち関係へのこだわりと不安を表していると考えられる。つまり、つながりを多く持つたところで、決して自分の気持ちの安定には結びついていないというところである。

実際に、「インタビュー」で、20代前半の男子学生に友だち関係と居場所について聞いてみた。

彼は、「僕はかなり確信的に友だちをつくっている。そのほつが、お得意だと思っ。なぜなら、チャンスが増えるから。博物館や美術館などは詳しい友だちと行ったほうが、本を読んで一人で勉強するよりも、

勉強になります」と、場面によって友だちを使い分けるメリットを話す。さらに、「僕は居場所がないから寂しくなつて携帯のメールとかするのかな」と思いました。一日中、大学にいちやだめだと思つて外に出ているんですけど、その理由はなにかというたら、活動するのに居心地のいいところを探しているんじゃないかな」と、友だちは多いが居場所のなさが彼の寂しい気持ちの一つの要因になっていると語る。HRIグループインタビューより。

図表4 仕事生活の満足度



一方、「多つながら関係安定」は4つのクランスターの中で、居場所がないと思つ比率が最も低い。これは配偶者や家庭など、身近な人や安定した所属先に居場所を見出しているということが考えられる。そのうえで、広くつながりを持ち、友だちと適度な距離感を保つことができているのではないだろうか。

自らかかわることで豊かな関係へ

人間関係は、かわり合つとすると同士の、互いの能動的な気持ちによって、前向きな関係をつくることができる。ここでは、「自分の周りで起きる出来事はしよせん他人事なので当事者意識は感じない」に対する答え(図表19)から、彼らの人間関係への当事者意識を探ってみた。

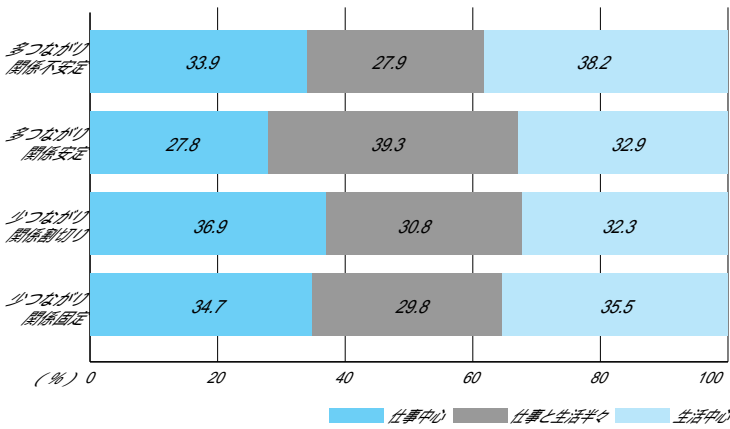
この問いに、「そう思う」「どちらかというとそう思う」と答えた人の合計は、明らかに「多つながら関係不安定」と「少つながら関係割り切り」で高い。前者は友だちとの関係に楽しみを見出し、友だちも多くのいるがそのわりには友だちにこだわる面もある。この場合、友だち関係へのとまどいが、当事者意識の低さに表われているといえまいか。

後者は友だち関係にあまり関心はな

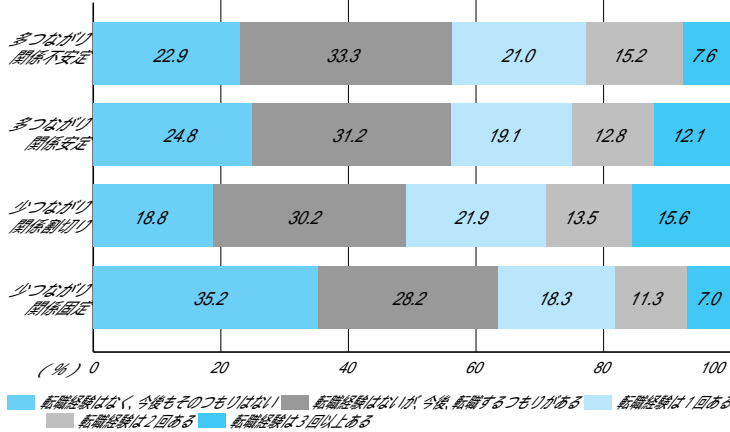
図表5 仕事をする一番の理由

順位	理由	多つながら関係不安定 (%)	多つながら関係安定 (%)	少つながら関係割り切り (%)	少つながら関係固定 (%)
1位	収入を確保するため	59.4	65.3	74.8	78.5
2位	自分の夢を実現するため	8.6	7.4	4.6	5.8
3位	社会との接点を持つため	5.9	6.0	3.8	3.3
4位	社会経験を積むため	5.3	3.7	3.1	2.5
5位	社会に貢献するため	4.8	3.7	3.1	2.5
6位	社会人として当然の義務だから	4.3	3.7	2.3	1.7
7位	専門的知識・技術等を取付するため	3.7	3.2	2.3	1.7
8位	キャリアを持つため	2.7	2.3	2.3	0.8
9位	人間関係、人脈を形成するため	2.1	1.6	1.5	0.8
10位	その他	1.6	1.4	1.5	0.8

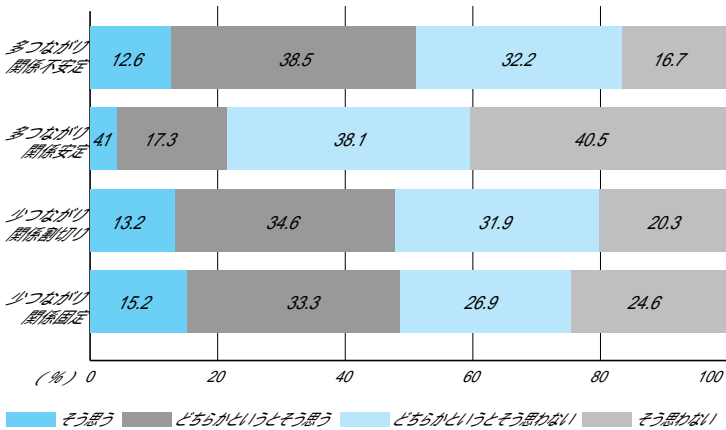
図表6 ワーク・ライフ・バランス



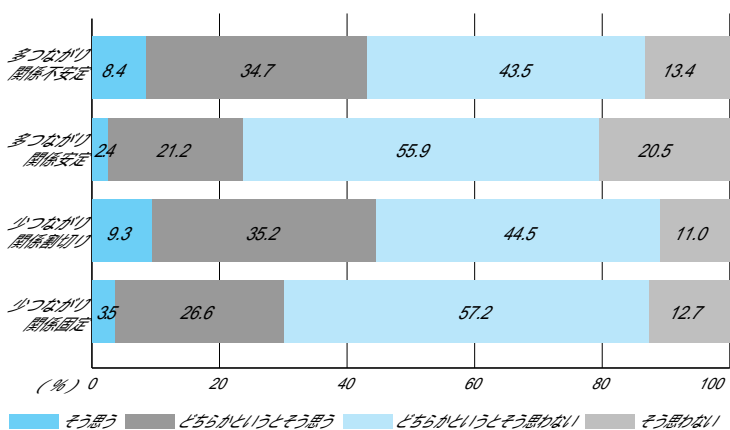
図表7 転職経験



図表8 自分には居場所がないと思うことがある



図表9 自分の周りで起きる出来事はしょせん他人事なので、当事者意識はない



く、それほどつながりは多くない。さらに、自ら人間関係にかかわるうとはしない。このクラスターは、仕事や生活に対する満足度がそれほど高くなく、現実的な考え方をしている。人間関係を含めて自らの生活を冷めた目で見ているのかも知れない。友だちのつながりや友だちへの関心が大きく違う両者に共通しているのは、「当事者意識」を持って他人にかかわろうとする気持ちが少ないということであった。これが、人間関係への不安定さ、割り切る気持ちにつながっているとはいえないだろうか。

一方、同じ「少つなかり」のクラスターである「少つなかり関係固定」は、少ないつながりながらも、その関係を大事にし、他者にかかわるうとする気持ちがある。これが友だちへの安心感につながっていると考えられる。

かつての居場所に変わる新たな場を

今回の調査から、若者の多くは人間関係を「希薄」「浅く広く」「場面によって友だちを分ける」と考えているわけではないことがわかった。彼らはネットワークの多少

に限らず、友だちとはある一定の距離を保ちながらも、互いのことを気にかけてあり、安定したつきあいをしている。

しかしその一方で、人とのつながりに不安を抱えている若者がいるのも事実である。単にたくさん人間関係を持つたからといって決して安定した関係を築いたことにはならない。自分の身の置き所が明確でないこと、自ら他人へかかわるうとしないことが、そつした一部の若者の人間関係を「つつしやしく不安定で」さらに割り切ったものにさせている。

人間関係は、他の人々に対して受身ではなく自らかかわること、一定した関係が作り上げられていくのだ。確かに現代の若者が、他の人々とかかわる居場所や積極的な人間関係を築いていくのは、容易なことではないかもしれない。かつての地域や職場のように、自らが切り開かなくても、そこに居ればある程度の一定した関係が築けるといって時代は過ぎたからだ。そつした現代だからこそ、新たな場を見いだすことが彼らのこれからの課題となっていくに違いない。